

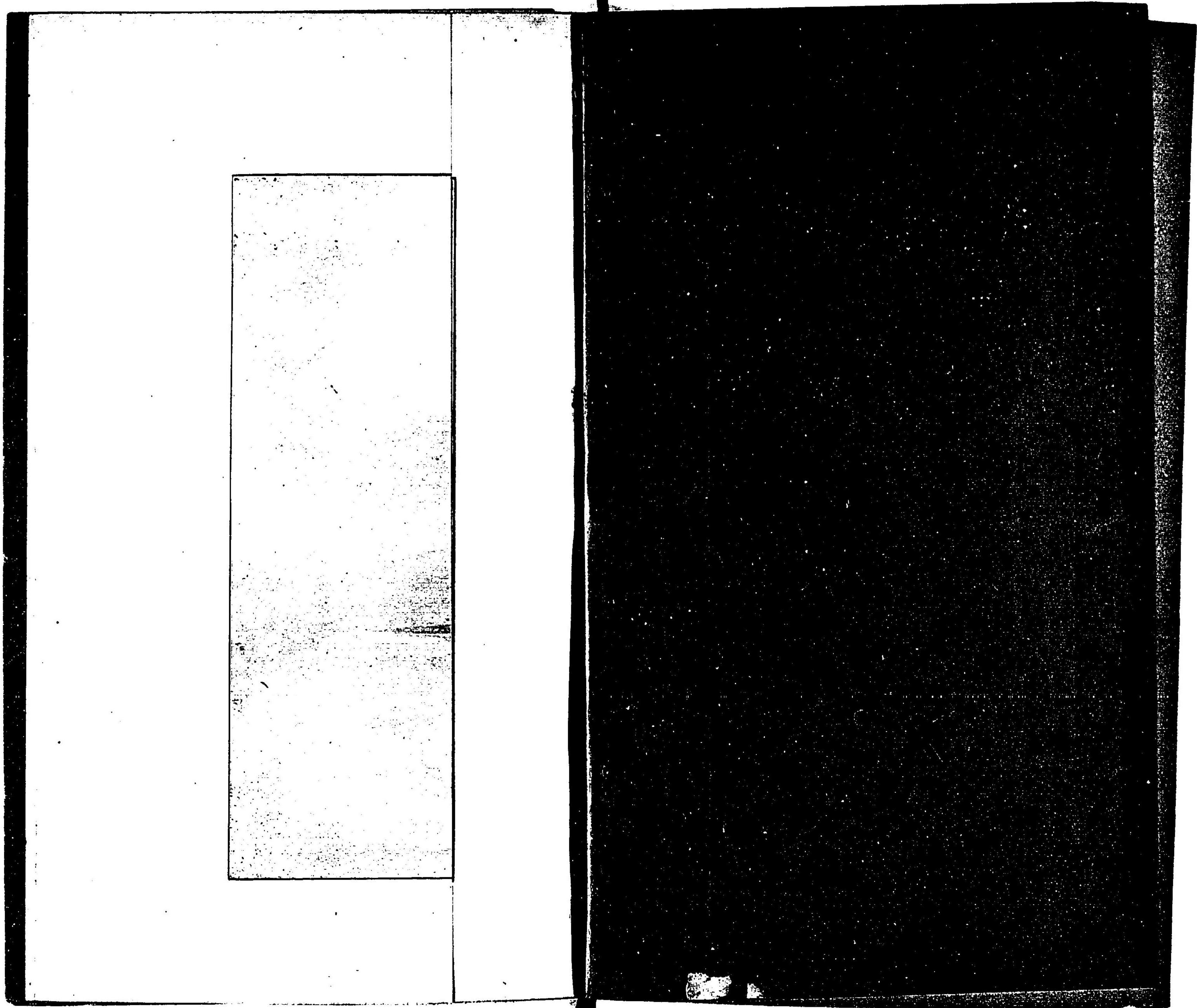
79  
50

村井弦齋新作

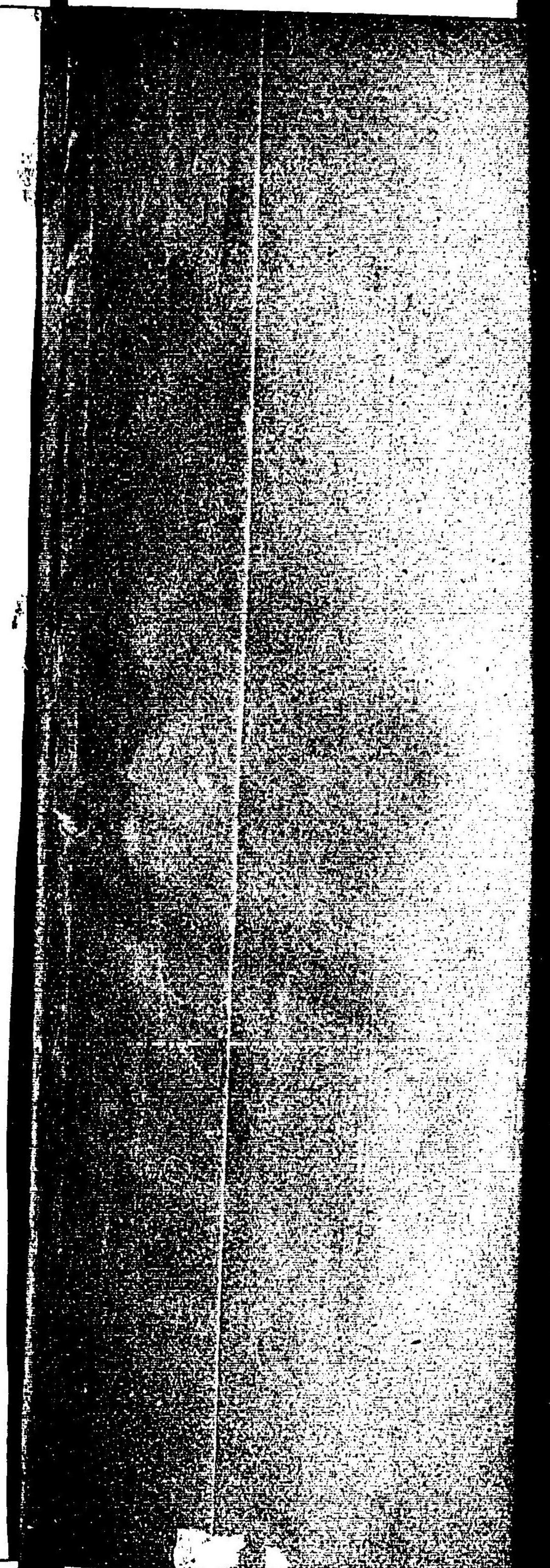
脚本  
**阿古屋及食道樂**

報知社出版部















自序

余は元來劇を好まず、加ふるに跡を劇場に絶つ事既に十五年、  
進の俳優の如き、その音容を知るもの僅に二三子のみ、余の著作  
往々場に登る事あるも余は未だ背て其劇を観たる事あらず、然る  
に今や筆を執りて演劇の脚本を草す、その自ら量らざる茫として  
闇中物を探るが如し、紙に臨んで時に自ら嗤笑の口に漏るゝを禁  
ずる能はず、然れども余に説あり、劇も亦た小説と同じく世道人  
心に益する事無くんは無用の長物のみと、余は阿古屋の劇に於て  
我邦古代の武士道を世界萬國に知らしめ、食道樂の劇に於て新趣  
味を今人の家庭に加へしめんと欲す、

明治

28 7 15

内交



劇は観るものあり、讀むものにあらず、歌は聞くものなり、讀むものにあらず、劇の善悪は目之を斷すべし、歌の巧拙は耳之を判すべし、今人多く此別を解せず、歌を評するに聲調音律の整否を問はずして徒に用語措辭の末を争ふ、劇を観るに無用の理屈を論議して眼に映するの妍媸如何を後にす、是れ文界の悪弊にあらずや、此脚本に對するものは願くは目と耳とに映する所如何を考へてその心に傳ふる所以を判せよ、

阿古屋の序幕源平兵士罵り合ひの一段は福地櫻痴先生の示教によりて加へたるものなり、此に其の懇情を謝す、

明治三十八年二月

弦 齋 識

脚本 阿古屋

村井弦齋作

序幕 八嶋合戦の場

舞臺は海岸の沖には平家の兵船多く見ゆる景色、  
 下手より平家の勇將新中納言知盛及其從者二三人苦戦の姿にて源氏の追兵と闘ひながら出て來り、松原の中央にて源氏の兵を追散らす、知盛は松の根方に腰打掛けて從者に向ひ

「今日のいくさも味方の敗北、思へば無念遣る方無い、源氏が斯くまで強いのは敵の大將義經がある故なり、義經をだに討取らば味



方の勝利疑ひ無し、誰かある味方の内に義経を討取らん程の武者は無しか」  
従者進み出で

「左ればで御座る、義経を討取らん程の者は能登守教経殿の弓勢か、左無くば悪七兵衛景清の、大力、此の二人の外には御座るまい」

知盛「その能登殿は如何致した、景清は何れの手へ参つた」  
従者「安徳天皇の御供してあの兵船に乗り移られました」

知盛「海上へ御動座とあれば天皇の御身は最早氣遣ふに及ばぬ、此上は能登殿景清を呼返して源氏の兵を打破らん、早く二人を呼戻せ」

と従者に命する時、源氏の兵大勢にて再び攻め来る、知盛等必死に闘ひながら引込む、

入り代つて下手より義経始め辨慶繼信忠信四天王等の勇士大勢出で来る、義経床几に腰をかけ

「さかに辨慶」  
辨慶「ハッ」と畏まる

義経「平家の軍兵は皆な兵船に移りしぞや、逃げ後れたる敵兵があの汀に蹈留まつて討死するも哀れなり、今日は味方の大勝利、無益の人を殺さん事戦ひの主意に非ず、逃ぐる敵は長追無用と留め候へ」

辨慶「難有き仰せ、敵方も嘸我君の御仁徳に洩き候はん、いかに者ども、長追無用」

と大聲に呼立つる、兵士等之を聞いて皆な戻り来る、  
井「實に御武勇と申し御仁恵と申し我君程の御大將を敵とする事平



家の者も其加に餘り  
片岡「速に降参致す御座らう」

伊勢「アレ、只今兵船一艘渚の方へ消ぎ寄せたり、船より出でたる  
大將は天晴れな武者振り、我君御油断あるべからず」  
と告ぐる時上手より能登守教経越中の次郎盛頼以下の兵士を連れて  
岩陰で出で来る、

盛頼岩陰より顔を出し

「ヤア、源家の陣へ物申さん、今日の寄手の大將はそも誰殿にて  
候ふぞ、官名實名高らかに御名乗り候へ」

源家の陣より伊勢三郎進み出で

伊勢「所望とあらば名乗つて聞かせん、あな事もおろかや、是れこそ  
は清和天皇十代の後胤鎌倉殿の御弟、大夫の判官義経公にて候

ムぞ」

源河「一の谷の合戦に乗ねて手並は知りつらん、無用の手向ひして二  
つ無き命を失ひ給ふを」

盛頼俄に打笑ひ

「アハ、ハ、ア、恐れ多くも勿体無くも安徳天皇に對し奉り叛逆の  
弓矢をひかん程のものは官名實名山あるものと思ひつるに、去り  
とては昔し平治の合戦に父を討たれて孤となり金賣商人の従者と  
なつて奥州で落ち延びたる小冠者よな、アレ、渚を見候へ、  
海より寄せ来る白波の巖に當つて砕くるぞや、源氏の兵もあの白  
波砕けぬ内に引き候へ」

備前進み出で

「舌長き事を申さる、御身の名こそ名乗り候へ」



「我れこそは平家の御内に於て越中の次郎盛経」  
徳井打笑ひ

「アハ、ハ、ア、平家の御内に於て名ある人かと思ひつるに、雪深い國の瘦せ侍、過ぎつる碓並山の合戦に打負けて辛き命を助かり乞食の姿にて都に上りし其人よ、アレ、空を見候へ、風に吹かる、浮雲の西へ」と走るや、陸の陣にもたまりかねて海まで逃げた平家武者、落ち行く先は唐天竺十萬億土まで参り候へ」

辨慶傍より

「十萬億土へ参るなら道を教ゆる僧侶の役目、此の辨慶が引導渡して取らせむ」

源氏方には坊主まで刃を執つて陣へ出る、よくくつはものに

盡きた事か

「いつまでも雑言無用、源氏の手並を知り度くば此まで寄せて勝負を致し候へ」

と招く時盛経の後ろより大音揚げ

「そこ、退き候へ」

と言ひながら弓矢を執つて立出でたる能登守教経

「ヤア、源氏の大將九郎判官義經に物申さん、我れこそは能登守教経、今日の見参に平家鍛冶が鍛へたる矢一筋参らせむ、受けて見給へ」

と聞くより義經立上らんとなし給ふ、佐藤繼信急に身を起し

「教経の弓勢侮るべからず、千金の御身を動かし給はで此場は某に任せ給へ、我君の御名代仕らん」



と義経を庇ひて陣の前に躍り出で、

「ヤア〜義経是れに在り」

と叫ぶ聲の下に矢一筋飛び来る、繼信は刀を以て拂はんと思せしが弓勢烈しく胸板へ通る、繼信後ろへ仆れる、敵兵二三人首を取らんと出で来れるを辨慶始め四天王等の諸勇士駆け出して敵を追ふ、敵兵も能登守も共に引込む、

此方にては源氏の兵士か繼信の矢を抜き捨て起して義経の前に抱き来る、繼信は急所の痛手に苦痛の體、

義経側へ寄り

「繼信、矢疵は淺いぞ、氣を確に持て」

繼信兩眼を開き、

「イヤ〜平家隨一の弓勢能登守が矢を急所に受けては逆も助から

ぬ某の命、我君の御身代りに立つと思へば武士の本懐、家の譽れ、

ナラ〜思ひ残す事は候はぬ」

と再び苦痛に憫む體、

義経兩眼より涙をハラ〜と流し、

「ア、惜しき郎等を討たせしよな、汝等兄弟は昔し奥州を出づる其

時から我身の側を片時も離れず、忠勤無二のものなるに、明日の

勝利を待ちもせて我身の爲めの身代りと脆くも消る今日の戰場、

目の前に汝を討たせし事は此の義経が片腕を失ふよりも辛らいぞ

よ、いかに忠信、樂は無いか、水を飲ませい」

忠信樂と水を繼信に飲ましむ、義経繼信の側へ寄り添ひ背中をさす

つて懇に介抱しかがら胸の疵所を眺め、

「所詮助からぬ此の重手」



と涙を拭ひ、

「のう繼信、汝が忠死は義經も過分に思ふぞよ、命さへあるならば  
天下一統の後重き恩賞を與ふべきに最早叶はぬ今世の別れ、盡き  
ぬは主従二世の縁、此上は汝が家を尋出だし、親や子供を買いで  
取らせむ、今はの際に申し遺す事は無いか」  
と涙ながらに繼信の手を取り給ふ、

繼信苦しき息の下より

「難有き我君の仰せ、お言葉に甘へ申すもおろかなれど、某の故郷  
には八十に餘る老母と十に足らぬ童の候ふ、老母には心安く餘年  
を送らせ又た童は天晴れの勇士に育て上げて我君の御役に立せん  
こと某が此世の望み」  
と言ひさして息も絶えんとす、

繼信「オー汝が頼みは義經が引受けた、心安く成佛せよ、南無阿彌陀  
佛」

と懇に吊ひ給ふ、繼信はニッコと笑つて息絶えたり、弟の忠信揺り  
動かさし、

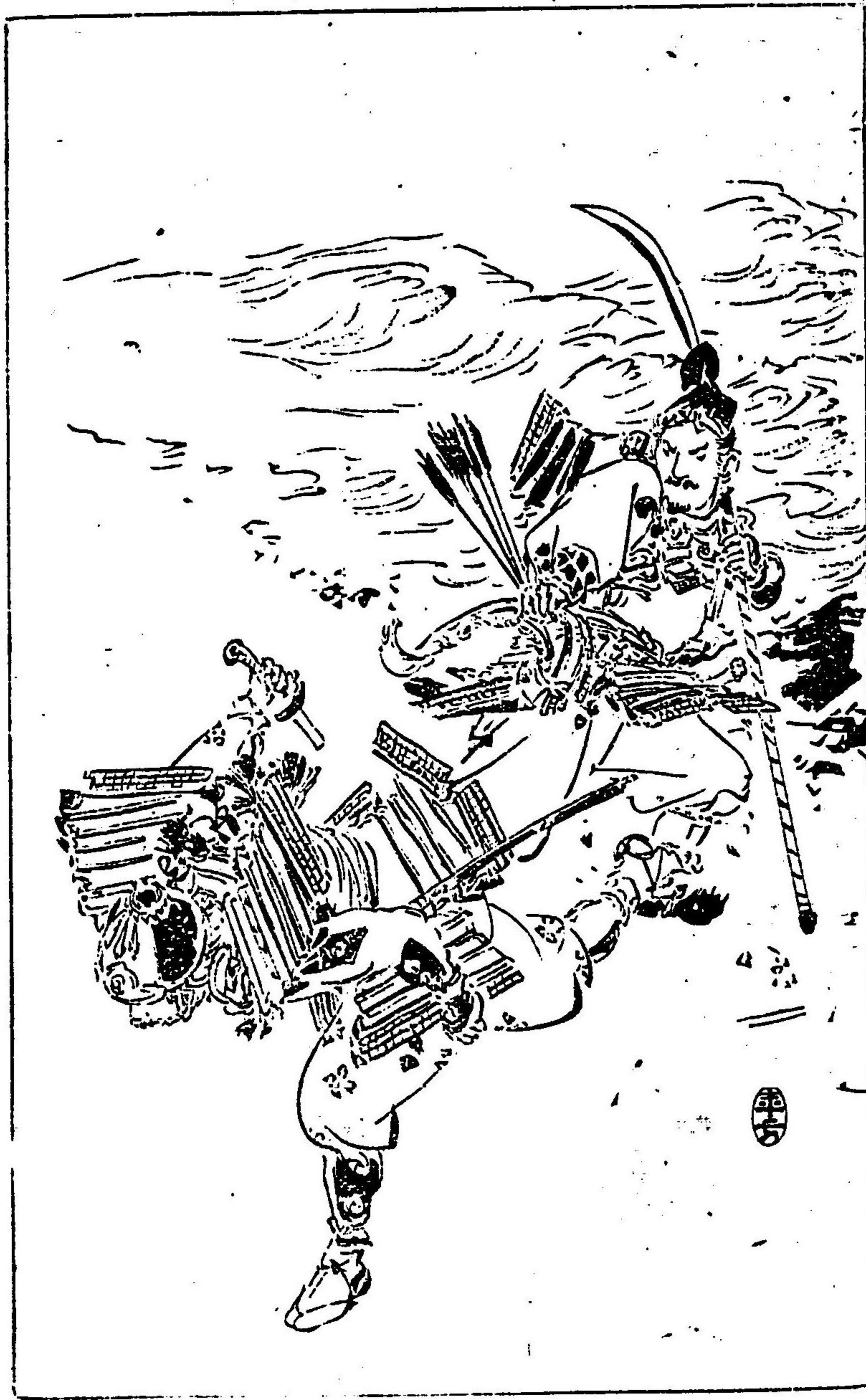
「兄上よ、繼信をのー」

と呼べども叫べども答へ無し、脇に居たる辨慶は珠數つまぐりて吊  
ふに義經も外の武士も皆な鎧の袖を絞つて悲歎の体、

繼信は兵士は繼信の死骸を引起す義經始め一同それを圍んで引込む、  
稍ありて上手より大薙刀を小脇に抱へてツシリと出で來れる惡  
七兵衛景清、大音揚げ、

「ヤア、遠からんものは音にも聞け、近くは寄つて目にも見よ、  
我れこそは平家の身内に於て横紙破りと言はれたる惡七兵衛景清





なり、我れと思はんものは尋常の勝負せよ」  
 と仁王立に突立つたり、

源氏の陣より大太刀を肩にかついで悠々と立出でたる三保谷二郎、  
 「オ一敵ながらその武者振の勇ましさよ、某は源家の身内に三保谷  
 二郎國俊と申す者、いでやお對手致さん」  
 と大太刀を取直す、

景清も前に進み、

「大力の噂ある三保谷どのか、對手に取つて不足は無い、人を交へ  
 ぬ一騎打、我が手並を見せ申さう」

と大太刀を振つて斬かゝる、三保谷も大太刀を使つて散々に戦ふ、  
 暫くすれども勝負見えず、總て景清は大太刀を大地に突立て、  
 「打物業は面倒なり、組んで力の勝負せむ」



と左の手を伸ばして三保谷を掴まんとす、三保谷態ど身を外し、  
「景清殿の武勇は聞きしに勝る、組打は望む所かれど今日は日も西  
山に傾いたり、明日こそ再び勝負せむ」

と立去らんとするを景清追駈けて後より鍬をムンズと掴み、

「卑怯なり三保の谷、此場に於て引返す事やある」

と引戻さんとするを三保の谷、

「イヤ〜今日は是れ迄あり」

と其儘前へ景清を引する、景清足を踏しめて後ろへ三保の谷を引戻  
す、一進一退、暫く争ふ内に双方の力充ちて兜の鍬バラ〜と切れ、

景清は後ろへよろける、三保谷も前へよろけながら振返り、

「景清の腕の強さよ」

景清鍬を握りしめ、

「三保谷が首の骨の強さよ、アハハ、」  
と高笑ひするにて幕、





貳幕目 男山道松並木の場

舞臺は松原道にて遙に男山八幡宮見ゆ。

白拍子阿古屋妹の乙女と共に花道へ出て来る、阿古屋立留まり、

「のう乙女、浮世は變るが習ひにて昨日迄も今日迄も飛鳥落した平家方は都を棄てて西國へ没落、今は野の末山の奥まで皆んな源氏の世となつて被る烏帽子も左折、迷ふ人毎にひくつけな東男計りじやのう」

乙女「ホンに思へば怨めしう御座んす、斯うやつて毎日く八幡様へ  
川参するのもしつにはあの景清様の御武運を頼らん爲め、又一つには今を昔に返さんと三七日の参詣も今日はモ一満願の日、何とか御利益がありそうなので御座んす」

阿古屋「その景清様は八島の合戦に討死なされたとも言ふし、又は爾うで無いとの噂もある、何れが何うとも分らないが生きて此世に御座るなら一目なりとも今一度お顔が見度いばかりに八幡様への無理なお願ひ、いつそ討死と分つたら愚痴も未練もあるまいものを、行術の知れぬが人ぢらし、ドゥソ確な事を聞き度いものじやのう」

乙女「八島の合戦に安徳天皇を始め奉り平家の御一門が皆んを入水召されたと云ふのはそりやホンの表向きの噂、實の處は義経の計らひで天皇始め平家の御一門を薩摩國へ落して遣つたと聞きませう、景清様も其中へ屹度交つておはしませう」

阿古屋「たとひ一時は逃げ延びても源家の大将頼朝公が平家追討の軍を起せば今度こそ平家はモ一叶はぬ、何にしても景清様、何處に



何うして御座るやら

乙女「早くお行衛が知れれば宜し」

と手を引合つて進む前より兵士五六人を従へて出で来れるは岩永左衛門、阿古屋を見て立塞がり

「でも美しい女じやな、都を離れた此の道へ供をも連れぬ女道士、何用あつて何處へ参る」

阿古屋「妾達は八幡様へ参詣の者」

乙女「ドウゾお通し遊ばして」

岩永「ウム、次第に依れば通しても遣らうが明日は此の八幡宮へ頼朝公の御参詣、身どもは非常を警めの役、通すも通さぬもこつちの心一つにある、看れば都びた其妻、全体そなたは何者じや」  
阿古屋「妾は都の白拍子五條坂の阿古屋と申すもの」

岩永びつくりした風に

「ウム、都に名高い白拍子、五條坂の阿古屋とはそなたであつたか、

してそつちの女は何者じや」

乙女「阿古屋の妹乙女で御座んす」

岩永「乙女とは名も聞かない、二束三文の白拍子じやな」

乙女「つんとして

「口の悪いお人じやのう」

岩永「アハ、怒つたか面白い、してそなたの兄弟は何で八幡様へ参詣

するのじや」

阿古屋「少し心願の仔細があつて毎日参詣致します」

岩永「ハ、ア成程聞えたわい、若い女の心願は決して外の事で無い、

言はずと知れた男の事、戀しいとか可愛いとか、その美しい



顔で多くの人を迷はすのじやな、だが随分迷はされても悪く無い、此方も少し迷はうか」

としなだれかゝるを阿古屋は振拂ひ

「遅くなつては歸りが難儀、ドウゾお通し遊ばして」

岩永「イヤ通さぬ、何うしても通さぬ、五條坂の阿古屋と聞いては滅多に此を通されぬわい、人の噂に平家の侍悪七兵衛景清は阿古屋に馴染を重ねたと云ふがそれは昔の事だらう、榮耀に就くが浮れ女の習ひ、今では源家の公達に馴染を重ねて居るだらうがハナ誰だか、誰にしても妬ましいわ」

と聞いて乙女が立腹の体、

「榮耀に就くが浮れ女の習ひとはそりや東女の事で御座んせう、都のものは白拍子でも女の操を忘れませぬ、東男は何ぞと云ふと都

人の悪口計り、ホンに好かぬ事じやのう」

岩永愈よ面白がり、

「ナニ女の操を忘れぬど、それでは今でも景清へ操を立てるのか、

アハ、氣の毒ながらその景清は八島の合戦で討死した」

「エ」と驚く阿古屋、

乙女も共にびつくりする、

岩永態と落付き拂ひ、

「そなたはまだ知るまいが景清は三保谷の二郎に討取られて首實際まで濟んで居る、亡者に操を立てるより今は源家一統の御世だ、頼朝公のお覚え目出度い此の岩永左衛門がそなたを最負にして取らせる、モ一参詣は止めにして今から身ごもの屋敷へ参れ」と無理に阿古屋を引張るに阿古屋と乙女は逃げんとするを岩永従者



に命じて四方を圍ませ遂に自ら阿古屋を捕へぬ、折から向ふより従者數人を連れて歩み來れる畠山重忠、此体を見て中に立入り、

「岩永氏、此の女に何の罪があつて手荒な事をし召される」

岩永グツと行きつまり、  
「是れは五條坂の白拍子、今頃此へ參詣とは少し迂散臭いと思ふに依つて身どもが屋敷へ引立てる積り」

重忠「イヤ白拍子に用は無い筈、明日は頼朝公が八幡宮へ御參詣、もしや平家の殘黨がつけねらふ事もあるかと貴殿が非常を警めの役、若い女にたづさはつて役目を忘れては相成るまじ」

岩永「ツム」  
と返答無し、





重忠「それとも我君へ此場の仕儀を申し上げるか」  
岩永「ウム」

と苦しがつて、

「勝手にしやれ」

と阿古屋を突放す、二人は嬉しそうに逃げて行く、重忠も岩永と分

れて左右へ入る、  
此時迄松の後ろに身を忍ばせて始終を聞き居たる乞食の景清ムック  
と出で、四邊を見廻し

「今のは確に坂東一の勇將と聞えたる畠山庄司重忠とやな、勇わり  
仁ある天晴れの侍、斯る勇士が守護なすからは頼朝を討たんこと  
尋常の業に非ず、だが待てよ、岩永左衛門の言葉に景清が討死と  
申したは阿古屋を欺す當座の嘘か、それとも斯様の噂が都に廣ま

つて居る事か、それならば丁度幸ひ、此に忍んで明日を俟ち、頼  
朝に近づいて只一突に刺殺さん」

と勇氣を含んで見えたるが急に向ふの方を眺め

「去りながら不憚なのはあの阿古屋、我身の生死を知りかねて八幡  
宮へ毎日の参詣、我身が此に居ると知つたら嘸悦ぶ事だらうが、  
迂つかり知らせぬ此身のありか、生中に逢へば大望の邪魔となる、  
逢はずに此儘別れやうか、だが跡で嘸阿古屋が怨むだらう、たと  
ひ本望を明かしたとて邪魔する様な女で無い、その真心を知りな  
がら逢はずに死ぬも心残り」

と延び上つて打眺め

「オー好い事がある、傳へ聞く晋の豫讓は敵の大將を討たん爲め妾  
をかへて先づ我が妻を欺したと云ふ、我身もそれに劣らぬ大望、



阿古屋が来たら物の試しに知らぬ顔で袖乞ひしやうか」  
と道の端にうづくまつて二人の下山を待つて居る、  
纏て阿古屋と乙女は草臥れたる風情にて此へ來なから

「のう乙女とした事が、そなたの足の速いこと、妾は草臥れて歩か  
れぬ、モ一少し待つて居や」

乙女「妾も草臥れましたれど先刻此でイヤな侍に逢つた故氣味が悪  
う御座んす程に早く通り抜けませう」  
と急ぐ處へ不意に横際より

「ドゥンや一文」

と手を出す乞食

乙女はびつくり飛退いて

「アレ、イヤな乞食だよ、いさあり人に胸をつぶさせて、カントに

胸がドキ／＼する」

と眩きながらस्ता／＼先へ行く、

阿古屋は乞食の前に足を留めて巾着より錢を取出し

「是れも功德の一つとや程にお鳥目を遣りませう」

と手づから錢を渡さんとする、乞食は思はず顔を擧げて一目見たる

がフイと横を向く、阿古屋は其顔を覗き込んで

「オヤあなたは」

と進み寄るに乞食は立上つて逃げんとするを阿古屋確り袖を押へ

「あなたは確に景清様、マア／＼待つて下さいませ」

と聞いて乙女も後ろへ戻り

「ナニ此の乞食が景清様」

阿古屋「アイ景清様に違ひ無い、表形ちは變れども變らぬものは武男の



形相、モーシ景清様、いつまで隠していらつしやる、聞えませぬワッ」

と縫りついて泣き出だす、乙女も共に取りすがる、景清は再び大地にドツカと坐し大聲にワーツと泣く、

阿古屋「オーお道理じや、斯んな悲しい事があらうか」  
景清俄に聲荒く

「コリヤ阿古屋、此で逢ふのが悲しくつて泣くのじや無い、そなたに易々と見露はされる様ではあ、姿を變へた甲斐も無い、晋の豫讓の例しに劣る我身の大望叶はぬかとそれが残念でならぬワッ」  
阿古屋は屹と身を正し

「晋の豫讓の例しとはハ、ア解りました、昔し晋楚の合戦に晋の豫讓は楚王の智伯を討たんとて漆を飲んで顔を變へ先づ我が妻の家

へ行つて知らぬ振りして袖乞ひしたらひさい乞食と腹立て、妻は豫讓を追出したとやら、それを例しに引かれるからは察する處此へ忍んで明日の社參に頼朝公を」

景清「コレさ聲が高い、その大聲を知る上は一目逢ふのが此世の別れだ、人目にかゝらぬ其内に早く此をいんで呉れ」

阿古屋「イエ、ああなたのお心を知つた上は何で此儘歸れませう、マア兎も角も妾の家へちよつこでも来て下さんせ」  
と袖を引く、

景清頭を振り

「人の心を知る上は邪魔立せぬがそなたの情けじや」

阿古屋「何でお邪魔を致しませう、去りながらよく思案して御覽なされ、あなたは乞食の妾になつて身を忍ばせるお積りでもそれが



返つて人目に立つ基、斯んなに身体のお立派な乞食が何處にありませう、身の丈は人に優れ武勇の形相現れた乞食姿はトント似合はぬ、いつそ形ちをかへるなら百姓の体があなたにそつくり、妾達が手傳つて好い様にしてあげう程に早く一緒に来て下さいませ」

乙女「ホんに姉上の言ふ通り景清様のお姿は乞食の借着をした様な、オホ、お立派なお乞食様で御座んす」  
と云はれて景清思案の体

「成程、爾う言へば至極尤も、斯んな時には乞食非人が得て疑ひを受けもの、コリヤ我身が悪るかつた、それでは跡からそなたの家へ参る故一足先へいんで呉れ」  
阿古屋「そんなら乾度」

乙女「待つて居ります」  
と二人は前へ歩み行く、花道より只一人現はれ出でたる最前の岩永  
大手を廣げて道を塞ぎ

「オ、阿古屋、邪魔なものはまいて了つた、サア身せもと共に屋敷へ参れ」

と二人を捕へんとする、二人は逃げんとして暫く立廻りあり、既に阿古屋の危くなりたる時不意に景清躍り出で、岩永を取つて投げ足に踏まへて動かさず、  
「サア此隙に早く」  
と二人の女を落し遣る、幕

同 男山八幡宮前橋の場



舞臺廻り正面總て男山入幡宮社前の体  
 白丁二人、一人が箒を持ちて水桶に片手をつき居眠りするを他の白  
 丁側へ寄り

「オイ、早く掃除をしねいか、今日は頼朝公の御参詣、塵の葉一  
 つ落ちて居ても相成らぬと神主様の御申付けだ、掃除が悪いとこ  
 ちどらの落度になるぞ」

源次は目が覺めて大欠伸をしながら

「ア、うるせいなわ、頼朝公の御参詣と聞いちや掃除をする張  
 合がねい、是れが以前の様に平家の公達の御参詣ならそれこそ塵  
 一つも残しちや置かねいが變れば變る世の有様、平家亡びて源氏  
 の世の中、己が親父も悪七兵衛景清様の郎黨であつたれど一の谷  
 の合戦で討死した、己らも小さい時は景清様に可愛がられたが大

さくなつての酒びたし、親も呆れて永の勘當、今こそ斯んな辛抱  
 人になつたから折を見て詫事を入れやうと思ふて居たに今度の合  
 戦で親爺は亡くなり、お主の景清様も行術が知れず、平家の御一  
 門と一緒に西國へ落ちられたとも言ふし、都に隠れて御座らつし  
 やると云ふ噂もある、何れが何うだか分らねいが景清様は無双の  
 勇士鬼を拉ぐ程の大力だからあの人が平家方に居らしたつたら源氏  
 の奴等は手も立つめい」

「景清様の御武勇は聞いて居るが源氏方にも皇山庄司重忠と云ふ  
 人は關東一の大力で一の谷の合戦に馬を背負つて鶴越を降りた  
 と云ふ、今日はその重忠始め源家の勇士が頼朝公のお供で來さ  
 つしやるから定めし立派な御社參だらう、是れから先は源家の  
 世の中、役目大事に勤めにやならねい、サア、早く掃きませ



5

と二人は別れて社前石段の下を掃く

百姓の体に打打ちたる景清が四邊を窺ひながら出て来りて權六に向ひ

「モシ、今日は頼朝様の御参詣、何時頃此へお出になりませう」

權六「お晝過ぎの御参詣だが今日は警固が嚴重だから其邊にウロウロして居ると追出されるぞ」

百姓「頼朝様は何んなお方だか一目見物し度いと思ふが此等でもちよつと見物は出来まいか」

權六「出来ぬ、平家の殘黨が頼朝公を付けねらふと大變だから今日は一人も外の人を圍ひの内へ置く事はならぬ、早く表へ出てうしやれ」

百姓「そこがお前の情けと云ふもの、さあ只は頼まぬ、是れをお前に取らせる程に好い處で見物させて呉れまいか」

と金子の包みを渡す、權六も心動いて遠くに離れ居たる源次を呼び「オイ、此のお百姓が頼朝公の御参詣を見物し度いと云ふが旨い處はあるまいかのう」

と云はれて源次は此方へ出で来り

「ナニ見物がし度い」

と百姓の顔を見てハツと驚く体、百姓もそれと目くばせして權六に指らしめぬこなし、源次何氣無き風にて

「園の内に人を入れる事はならぬいがそれ程に言はれるならあの石燈籠の蔭でちよつくりちよつと見物をさせても宜からう」

權六「それならばあの蔭に置かれて居て頼朝公の通る處を見上げさつし



やい、ドレ掃除が遅くなつた、早くそこらを掃きませう」

と掃除にかゝり遠くへ去る、

百姓は石燈籠の陰に潜み、源次を呼びて何か耳打し、源次領いて退

どく、

花道より頼朝公の行列出で来る、

頼朝公途中に立留まつて重忠を顧み給ひ

「さかに重忠」

重忠「ハッ」

頼朝公「昔しに變らぬ男山八幡宮、いつみても神々しき社じやのう」

と八幡宮の方を眺め、

「頼朝が今日の參詣は平家追討の禱りの爲と世の人専ら嘯する由、

我身が平家を追討するは私の怨みを酬ひんが爲りならず、保元以

來の動亂を打鎮め上は一天萬乘の君の御心を安め奉り下は萬民塗

炭の苦みを救はん爲めなり、禱る所は世の泰平、我の心は他事無

きものを、汝等も其心して神前に禱りを奉げい」

承忠「ハッ、く、我君の尊き御心を承はり某ども一同恐れ入り奉る、

あはれ敵方の人々も其の御仁恵の御言葉を聞かば忽ち前非を後

悔して

「程無く軍門に」

「降参致しませう」

と一同打連れ前へ進む、

頼朝公が石段の上に足をかけんとする時石燈籠の陰より白刃を抜い

て躍り出でたる百姓妻の景清

「頼朝待て」



と云ひながら頼朝に飛びかゝらんとする、公の後ろに扣へたる重忠

が「無禮者、すさり居らう」

と大喝一聲して大手を振り曲者を遮る、

曲者重忠を突き退け進まんとするを大力の重忠に突き飛ばされタジ

くと後ろへよろける、その暇に重忠傍の立木を引抜き頼朝公を庇

ひて寄せ付けず、公は佩刀に手をかけ身構へ給ふ、

武士大勢曲者を圍み大立廻りあり、曲者一方を斬抜けて逃げ出す、

「今のは確に平家名代の悪七兵衛景清」

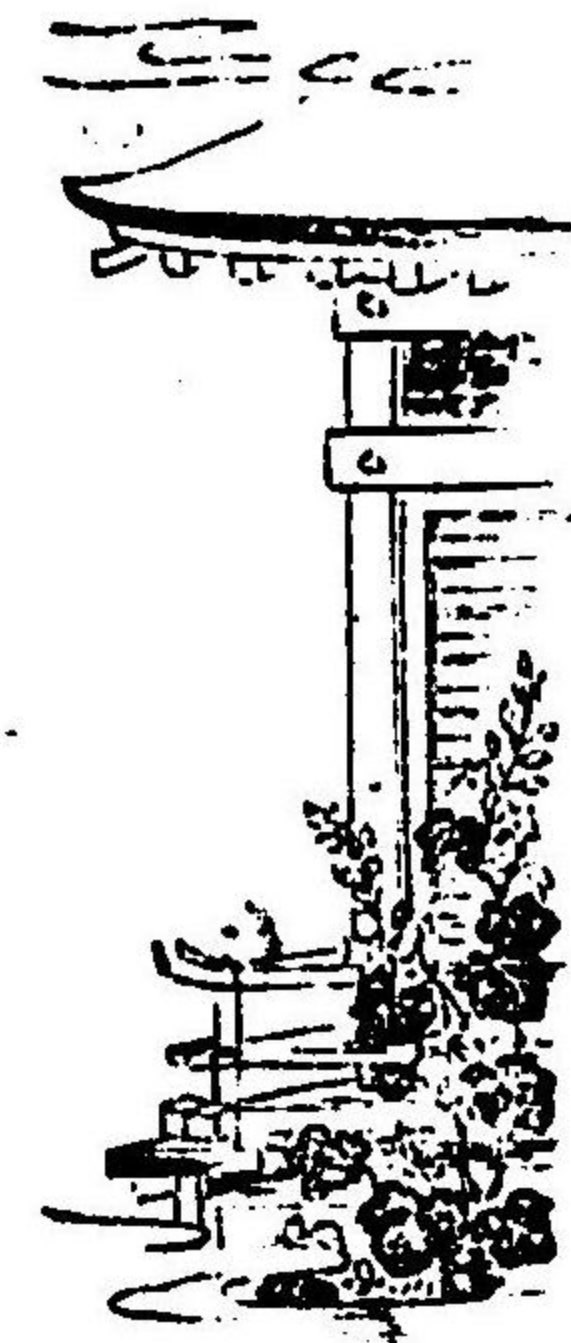
と武士ども一同追はんとするを頼朝公制止給ひ

「追はずとも敵は通るゝものならず、曲者に妨げられて頼朝が今日の社参を怠らば一代の耻辱なり、者ども來れ」

と一同を招いて悠々として石段を登り給ふ、遠くへ逃げ延びたる景清取り付く武士一人を投げ倒して足をかけ一人の手を捻じ上げながら遙に頼朝の姿を睨み

「ても武運めで度き頼朝よな」

頼朝振り返る體にて暮、





三幕目 阿古屋宅の場

本舞臺阿古屋宅の土間板敷、踊り稽古場の見え、向ふに上段の間あり、

阿古屋は妹の乙女と共に琴を前に置いて二つ三つ弾じて居たるが乙女は茶を汲んで姉の前に出し

「姉上様人目を避ける琴の調べもあの人の事がお心にかゝつていつもの様な音色が出ませぬ、心ある人に聞かれたら却て不審を打たれませう」

阿古屋は琴の手を停め

「はんに心もウハの空、それ程までに琴の音が遠ふかのう」

乙女「遠ふどころで御座んせぬ、今の様な下手な琴なら此の私にでも

弾けまする、是れも誰故オホ、あの景清様は首尾好く本望を遂げられたか、それとも仕損じ召されたか、早く便りが聞き度う御座んす」

阿古屋「コレさ聲が高い、今も表を通る人が男山で狼藉者が出たと云ふ噂をして行つた、頼朝公が殺されたとも聞かないから殊に依つたら仕損じて」

乙女「景清様はお捕られになりましたらうか」

阿古屋「イヤ、滅多に捕られる事は無い、一度で本望を遂げぬ時は晋の豫謀の例に倣ひ二度も三度もつけねらつて必ず頼朝を殺さしや置かねと決心固き景清様、屹度一方を斬抜けて何處へか落ち延びなされたらう」

乙女「そんなら早く此の家へ忍んで御座ればよいものを」



阿古屋「晝間は人目の繁き故日が暮れたらば氣をつけて」  
乙女「アラ裏口に人の足音」

上るり「夕暮の空さへ曇る雨模様、心は闇にあらねども思ひ立つ矢の仇  
となり、石にも木にも心置く、世を忍ぶ身の景清はそつと雨戸  
を押明けて」

「オー阿古屋、今日はマシマと仕損じた、昔しの家來に手引されて  
屈竟の處へ身を忍ばせ大願成就と頼朝を討たんとせしが殘念や關  
東一の勇將と聞えたる重忠めに過ぎられ頼朝の側へ近づくと事は  
ず、其内大勢に取圍まれ、一方を斬抜けて漸く其場を遁れたが當  
座は詮議が厳しからう、我身は一旦都を通れ、時節を待つて頼朝  
を必ず共に討たねばならぬ、去るにても血汐の付いた此の衣服、  
なりをかへねば人目に立つ、早く外の衣服を出して給はれ」

阿古屋「おなりは何うでも變ませうがマア、爾んなに急ぐ事は無い、  
見ればお怪我もある様子、ゆるく疵の手當して以前の様に此  
の床下へ暫く忍んで居らせませ、丁度幸ひ此の舞衣、これを召  
しておなりをば」

「換へさせ給へ景清様と舞衣取つて側へ寄る心盡しの裏表、縫も模様  
も眞實の誠や中に籠るらん、景清上衣を押脱けば下は血汐の唐紅、  
阿古屋はびつくり胸をつさ」

「コレマア此のお怪我、何うして此儘いなれませう」  
と聲も涙に曇り行く心の内の苦しきは疵の痛みに優るらん

景清「是れしきの手疵、手當に及ばぬ、それよりも此に長居して追手  
がかゝらばそなたの難儀、一刻も早く立退かん」

阿古屋「わらはの難儀は覺悟の前、生中にそとへ出で見咎められては」



大事、假令十日が二十日でも此に忍んで徐々と疵の養生な  
りませ」と

「涙ながらに景清の疵の手當も後や先き、逢へば別れと知りながら今  
別れては今生の永き別れとなるものを、たとひ一時半時でもお側に  
居るか身の願ひ、ドゥン此家を隠れがに人目を忍んでおはしませと  
祈る心の甲斐も無く乙女は慌て、かけ来り

「姉上様アレ、人馬の聲が聞えます」と

「聞くより驚く景清を阿古屋はそつと床下の土間の穴へと押し隠し、  
わたり心に配りつゝ、琴引寄せて二ツ三ツ鳴らす音色も糸調べ、折  
からドヤ、表より現れ来る岩永左衛門大勢の兵士を引連れて内  
入り

「そなたは昨日逢つた阿古屋じやな、昨日はよくも避くさつた、今

日はモーのがさぬぞ、そこでなをあなたの馴染んだ景清が今日我君  
に狼籍を働き身共が取押へんとなしたるに風を食つて逐電した、  
その景清は必ず共に此へ逃げ込んだに相違無い、サア景清は何處  
に居る、真直に白状しろ」

と權柄づくの大音聲

阿古屋はニッココと打笑ひ

「是れは思ひも寄らぬお疑ひ、あなたが昨日のお言葉に景清は討死  
したとやら、死んだ人が此へ逃込む筈も無い、あなたは亡者をお  
捜しなさるか」

岩永「ウム、その景清は生返つた、屹度此家に居るであらう、家捜し

ゝても引出して見せるぞ」

阿古屋「亡者の詮議なら佛壇の中でもお捜しあされ」



と素知らぬ顔して取合はず、岩永兵士に下知なして家の内を詮議させたれを尋ね索むる景清の影も無く、尋ねあぐみて兵士ども奥より乙女を連れ来り

「家の内には此女の外猫の子一匹も居りませぬ」

岩永「乙女やつばめに用は無、サア景清を何處へ逃がした、早くありかを抜かさぬか、白状せぬと拷問にかけるぞ」

阿古屋「去りとはきつい御難題、武士は情けあるものと聞きつるに拷問とはおそろしや、假令ひ拷問にかけられても知らぬ事は何處までも存じませぬ」と

心は動かぬ丈夫の魂岩永赫と腹を立て

「言はせて置けば何處迄も強情な女、水責火責の辛き目見せて屹度白状させて見せう、それ兵士ども此の阿古屋に縄打て」と

「下知に従ひ兵士どもバラ／＼と驅け寄つて阿古屋に縄をかけにける、縄はかけても心をいましめられぬ女の念力、良人の大事は此處なりと氣を落付けて悪るびれず、折から表に聲あつて

「アイヤ待たれよ岩永氏、女を縛るは武門の法に非ず、その阿古屋は某が取調べん」

と言ひながら悠然と入り来る島山重忠、岩永きよつと振返り

「ヤア貴殿は誰の命によつて某が役目へ口を出される」

「某は頼朝公より景清詮議の大任を蒙る、貴殿は市中取締の役目、

景清の事は某が引受けて取調べん」

岩永「何と景清の詮議を貴殿へ仰付けられたと、某も市中取締の身として今日の様な狼籍者を取逃がしては末代の耻辱、今此家を家捜し、たれを景清の姿見えぬゆへ此阿古屋を調べる處、優し



く見えても強情な女ちよつくり拷問にかけて景清の有かを言はせて了へば某が功名に成るものを、少しの間某が詮議を見物せられよ」

重忠「アイヤ功名手柄は私事、此女を拷問して景清の有かが分るとあらば某が拷問致す御座らう」

岩永「貴殿の手ぬるい拷問では中々阿古屋が白状しまい、其時は某が厳しき詮議、屹度白状させて見せう、して貴殿の拷問は割竹か石抱さかそれとも水責火責を用ゐらるゝか」

重忠「某が拷問の資道具はオーソレ、阿古屋の前に美しい琴がある、そなたは今迄琴の稽古を致して居つたか、そなたの音曲に堪能な噂は我が東國にまで隠れも無い、我身も戰場に出でしより久しく琴の音を聞かぬ、丁度幸ひ此場に於て琴の一曲を彈じて聞

かせい、それ者ども阿古屋の繩を解いて遣れ」

いましめの繩を解かしむる仁恵の言葉に岩永は打驚き

「重忠どのには酒にでも酔はれたか、景清の詮議を餘所にして琴の所望は其意を得ぬ、阿古屋の美しい色香に愛で、御身の心が狂はれたか」

重忠打笑ひ

「イヤどよ、是れこそ某が拷問で御座る、心に疚しき事あれば琴の音色に現はれん、口は隠せど心まで隠し了せぬ琴の調へ、いでて一曲を所望じや」

「優しき中にゆるぎ無き大磐石の重忠が言葉は今の繩ならで心をしはる千筋の糸、阿古屋の胸の苦しさは水責火責に優るらん、去りながら生中にためらひては詮も無しと打騒ぐ胸を押しづめ



「あ、情けある重忠さまの仰せかな、琴の音色に心の内を明かすは  
 妾の望む所、只今迄も妾達が神泉苑の舞曲の稽古、羽衣の曲をさ  
 らひたれば心の内の曇り無き天人の一曲を奏し申さん、コレ乙女、  
 そちも仕度して重忠さまの御前に羽衣の舞を舞ふて見や」  
 「と琴引寄せかき鳴らす、音色に連れて乙女子が舞の手振も霓裳の悠  
 にやさしき羽衣の曲、

「萬里の高山に雲忽ちに晴れ、仰げば遠き虚空より霞を破り雲を分  
 け羽衣泛々と舞ひ下れるは天津御空の天乙女  
 いづくぞ清き眺めぞと遙に下界を見てあれば前には烟波渺々たる  
 田子の浦、後ろは残んの白雪の色もまばゆき富士の峯、中に連な  
 る一帯の松の碧の影清き三つ穂の浦の三保の松原、實にそれこそ  
 は三國一の風景よと羽の衣を松にかけ、玉の砂の砂原に立休らひ

て眺むれば海原超ゆる春風に沖の白波吹き寄せて影明らけき清見  
 洞、波間を分けて行く舟の白帆にうつる朝日影、千鳥鷗の二つ三  
 つ渚に飛ぶも面白や、

折から後ろに人音して松にかけたる羽衣を盗み行かんとなしけれ  
 ば乙女は遙に之を見て「のう、それは我が物よ、何しに取りて  
 行かるゝ予」漁夫「是は拾ひたる衣にて候ふ」乙女「それは天人の羽  
 衣とてたやすく人間に與ふべきものにあらず、本の如くに置き給  
 へ」漁夫「そも此の衣の御ぬしとは扱ては天人にてましますかや、  
 さもわらば末世の奇特にと、め置き國の寶となすべきなり、衣を  
 かへす事あるまじ」乙女「かなしやな、羽衣無くては飛行の道も絶  
 え天上にかへらん事も叶ふまじ、さりとては返したび給へ」此の  
 御詞をさくよりもいよいよはくれう力を得、本より此身は心無き



天の羽衣とりかくしかなふまじとて立退けば「今はさながら天人も羽無き鳥の如くにてあがらんとすれば衣無し、地にまた住めば下界なり、さやあらんかくやあらんと悲しめど」「はくれう衣をかへさねば」「力及ばず」「せんかたも涙の露の玉盤かざしの花もしを」と天人の五衰も目のまへにみえてあさましや  
「いかに申し候ふ、御姿を見たてまつればあまりに御痛はしく候ふ程に衣をかへし申さうするにて候ふ、「あらうれしやこなたへ給はり候へ、「しばらく承り及びたる天人の舞樂、たゞ今こゝにて奏し給は、衣をかへし申すべし、「うれしやさては天上にかへらん事をえたり、此よるこびに逆もさらば人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり、たゞ今こゝにて奏しつゝ世のうき人につたふべし、さりながら衣なくては叶ふまじ、さりどてはまづかへし

給へ、「いや此衣をかへしなば舞曲をなさで其まゝに天にやわがり給ふべき、「いやうたがひは人間にあり、天に偽りなき物を、「あらはづかしやさらばとて羽衣を返し興ふれば、乙女は衣を着しつゝ、覽裳羽衣の曲をなし、天の羽衣浦風にたなびきたなびく三保の松原、浮島が雲のわしたか山や富士の高嶺かすかになりて天のみそらの霞にまぎれてうせにけり」と  
舞ひの袖をかざしつゝ乙女は奥へ行きければ阿古屋は琴を押やりて阿古屋「拙さ手業も御所望故、お耳障りやお目障りはドゥゾ赦して下さませ」と  
氣を落付けてしどやかな様子に重忠感じ入り  
「流石に名高き堪能とて琴の音色も澄み渡り此の重忠も久し振りで好い保養を致した、天人の言葉のそれからで、いや疑ひは人間に



在り天に偽り無きものと眞實龍めたそなたの心、其心にめで、今日の詮議は赦して取らせる」

と仁惠の言葉に阿古屋はハツと頭を下げ

「あゝ難有い重忠さま、四相を悟るおん方と噂にたがはぬ今のお言葉、それに引かへ岩永さま、水責火責に逢へばとて明けて言はれぬ胸の内、ようく察して下さりませ」

岩永「ウヌ人を馬鹿にする」

と怒りを含んで立ちかゝる、重忠徐に之を制し床几を離れて立ちけるが俄に四邊を蛇と見廻し

「岩永氏、阿古屋の座せる床の板、一枚浮いて隙がある、あの床下を詮議召されたか」

と岩をも透す其聲に阿古屋はハツと胸どゝろく岩永進み出で

「家の内は残らず捜したれどあの床下はハツと調べ申さぬ、成程あの床下へ景清を隠して置くに相違無い、イデ引出して詮議致さん」と進み出づるを重忠制し

「イヤ詮議に及ばぬ、平家随一の剛の者景清とも云はれる武士が心の清き此の阿古屋へ難儀のかゝるを知りながら命惜しさに床下へ長く忍ばん謂れは無い、假令へ此家を通るゝとも袋の鼠籠の鳥、先づ――某に任せ給へ」

「と従者を引連れ立出づる姿は悠に優しけれども心に片時の油断も無し、虎の領はのがれても逆ものがれぬ此の眼力と覺悟を極めた景清は床板を刎のけ踊り出で

「重忠待つた」

と呼び留めた、重忠振り返り



「オ、景清か、自ら名乗り出でたるは」

景清「今の言葉が身に浸みて通れぬ命と覺悟した、去りながら重忠、我身は私の怨みを以て頼朝をねらうものにあらず、西國に座します安徳天皇の御身の上の氣遣はしさに頼朝を殺さんと計りしなり、もしも頼朝が天皇に害心を抱く事あらば此の景清が鬼となつて源氏の奴原を取り殺すぞ」

と云ふに重忠威儀を正し

「我君頼朝公は天下泰平の御成りを入幡宮へさしげらるゝ程の御仁徳、私の怨みは露程も持ち給はぬ、安徳天皇は我が天皇の御連枝にて渡らせ給ふ、普天の下卒士の演、何人か天皇に害心あるべき、それよりも平家こそ安徳天皇を我物にして一門と共に御最後を遂げさせ奉らん事不忠不義の至りならずや」

景清「その言葉に偽り無くば我身は死んでも惜しからぬ、イテ頼朝の

前に曳き首打つて軍陣の血祭りにせよ」

と覺悟を極めた勇士の振舞、自ら兩手を後ろへ廻す、重忠手づから繩をかけ

「武門の習と云ひ乍ら斯る勇士に繩をかけんも心の辛い身の役目、

いかに景清、少しの猶豫は許して取らせる、阿古屋に申す事は無  
うか」

と情けの言葉に景清も張り詰めし氣のゆるみけん剛の眼に涙を流す  
「コレもう阿古屋、何事も是れ迄の縁にしなり、我身は是れから死  
に、行く、冥途の旅の門出に琴を弾じて我身を送れ」

阿古屋は泣く、琴引寄せて聲も涙に咽びつゝ、

「花は萎れて落ちんより風に散るこそ美しく、人は病に死なんより



討死するが勇まし、花は散りても香が残る、人は死しても名が残る」  
と繰返し、哀れに語る聲の中に重忠は景清を引立て、頼朝の陣所へかへり行く、

附言 安徳天皇は八島増の浦の合戦に崩御ありし如く歴史に傳ふれども其實安徳天皇は大隅國種が島に御遷座あり、平家の一門是れを守護し奉りて天壽を終らせ給ひける、

脚本 旗の宅屋

村井 彦 作

序幕 大原宅の場

正面は大原家座敷、障子を隔て、臺所と並ぶ體  
黒木綿の紋付着たる大原満火鉢の前に坐して意氣揚々と履婆を呼び  
「オイ婆や、モいお登和さんが来て呉れそうなものだの、今日は僕の御両親が國からお着きにあるからおとわさんに頼んで大御馳走を拵へるのだが急の催しだから中々人手が足りない、車屋のおかみさんが手傳ひに来て呉れるだらうか」



大原 大原「ハイあのおかみさんは外の人まで連れて来て御手傳ひすると言ひました、御両親様がお着き遊ばしたら程無くおとわさまと御婚禮なさい文すか、オホ、お楽しみでいらつしやいますネ」

大原 愧かしそうに

「ウフ、好く似合ふだらう」

大原

「是れはしたり、ナゼ」

大原

「だつてもおとわさまの方があんまり好過ぎますもの」

大原

「アハ、好過ぎる位なら結構だ、オヤ駒下駄の音がする、あれはおとわさんに違無い、婆や出て御覽」

大原

「オホ、お察しの好い事」

と言ふ時おとわ表より小さき包を携へて入り来り、大原に挨拶して

「大きに遅くなりました、兄も一所に参る積りでしたが、シュークリームの皮を焼いて居り文すので、もう少し遅くなりませう、時にモ一時間も澤山御座いませんし、今から晩まで色々な御馳走を拵へますには手傳ひの人でも二三人無いと困ります、小山の奥さん

もいらつしやいませうか」

大原

「ハイ小山君御夫婦にも来て下さる様にお願ひ申しました、それに先刻車屋のかみさんを手傳ひに頼みましたら近所の人まで澤山連れて来ると申しました」

大原

「それは何よりです」

と話して居る時表から劇しく入りたる車屋の内儀沓脱の前に立ちながら

「旦那様、先刻婆やさんからのお話しがあつたのでお臺所のお手傳



ひに参りましたがお人が大勢お入用だと云ふ事ですから近所の遊んで居る人達を頼んで参りました」

大原も愉快氣に「それは大きに難有う、皆んな此方へ入つて下さり」

内儀表を振返り「サア皆さん、構はないからお入りあさい」

と云へど誰も入り来らず、大原立上りながら

「ナニも遠慮する事は無い、ドシ〜此方へ来たら宜からう」

と云ひつゝ立上つて表を見れば大道狭しと立並ぶは幾十人とも幾百人とも數へ盡せぬ大人數大原びつくりし

「サア是れは〜」

と呆れ顔に大手を廣げて身を反らせ

「凡そ一大隊程繰り込んだ、何うした事だえ」

内儀「だつても婆やさんが成るだけ大勢頼んで呉れると被仰るから足を摺こ木にしてホウ〜頼んで廻つたのです、先づ宿の若い者

が二三人、それからお隣の小母さん、向ふの娘さん、裏の家の權助さんから向ふ横町の守つ子さんまで皆んな連れて参りました、先づザット三四十人はありませうがまだ足りなければ百人

位は連れて来ます」

門の外から車屋の若者妙に腕を振廻し

「旦那え、わつちもお役に立ちますめいが力業から何でも致しやす」

守つ子「大原の旦那、今日は」



と大勢がガヤ／＼するに大原當惑顔

「イヤハヤ大變だ、そんなに来たつて入る處が無い、マアお隣の小母さんに向ふの娘さん位頼む事にして外の人は折角来てお呉れだつたが頼む様なら復た爾う云つて進げる事にしやう」

と云はれて内儀は別になつかりした風もせず、呑氣らしく振返り

「じゃ隣のおばさんと向ふのお鐵さんだけが残る事にして跡は皆んな歸つて下さり」

と云ふにおとわ側より

「モシ大原さん宅の兄がシューの皮を焼いて居ますが出来るだけ澤山掛へ交すから少し其方へお手傳ひを廻して下さり」

大原「では爾うしませう、モシ／＼外の人は中川さんの方へ行つて聞いて見てお呉れ、向ふでも手傳ひが要るそうだから」

妻の車夫「ハイ長り交した、それなら中川さんの方へ参りませう」  
とドヤ／＼歸り去る、

おばさんとお鐵さんは家の内に入りて大原に挨拶する、

おとわ「大原さん、早くお料理の仕度にかゝりませう、遅くなると困りますから」

と婆やを先に立て、臺所に入る、車屋の内儀もおばさんもお鐵さんも後からついて来る、大原も立つて臺所口へ行く

おとわ「婆やさん、エツプルが二三枚ありました、あれを出して皆さんに貸してお進げなさい、足り無ければコック前掛でも宜いから」

と自分は風呂敷包を開いてエツプルを着し

「車屋のおかみさんも斯う云ふ風におかけなさい」



と着せて遣る、お鐵さんも同ヒエツプルを着る、婆やはゴック前掛を着る、おばさんにも前掛をかける、車屋のかみさんエツプルへ手を通して踊る様な真似をし

「成程是れは調法です、斯うすると衣服は汚れないし、袖も邪魔にならなくつて何んかに宜いでせう、お鐵さん、あなたも家で斯ういふ物をお拵へなさいな」

「ハイ爾う致しませう、之を着ると樂に働けます」

と頻にその仕立方を息氣を付けて居る、おどわはテーブルの上にあるアルボース石鹼を取り

「さア皆さんも此の石ボンで手を洗つて下さい、お料理にかゝる時は必ず此のシャボンで手を洗はないと不潔い垢が食物へ付きます、布巾でも何でも臺所で使ふものは是れで年中洗つて置かなければ

なりませせん、是れは殺虫シャボンと云つて何んな虫でも皆んな死にます。

「ハイ卒中シャボン、虫が卒中を起してひつくりかへりませうか、

蚤や虱も」

「オホ、洗濯に使へば蚤も死にませう」

と自ら先に立つて後ろへ行き手を清めてストープの前に来る、

おどわはあたりを見廻し

「エート牛肉が買つてありました、先づあれを挽いてソーカデンにしませう、婆やさん、其肉を薄く切つて下さい、それから誰か

力のある人が肉挽器械を廻して下さい」

大原進み来り  
「オット、その役は僕がお手傳ひ致しませう」



と器械の柄を握る、おとわはパンを水につけて絞りながら  
「婆やさん、お皿を布巾で拭いて器械の前へ置いてそれから肉を入  
れて下ささ」

「ハイ」と婆やは肉を入れる、

大原クルくど器械を廻せば肉は紐の様になつて出で来る、手傳ひ  
のおばさん感心した顔して

「オヤアア妙で御座いますこと、是れなら庖丁で叩く世話もありま  
せんネ」

おつ「ホントに不思議の様です」

車屋のかみさん

「何と云ふ器械ですつて」

大原「肉挽器械」

おつ「齒の無い人なんぢは斯うして食べるのに限りませす子」

此中に肉は出て了ひ、お登和はパンの絞りたるを入れる、大原挽い  
て出す、

おとわ「是れをさせてモー一度挽きます」

と復た挽かしむ、再び出たるを

「モー一遍」

と三度挽かしめて鹽と胡椒を振り、手で丸めて

「誰かそのランパンを取つて下ささ」

「ハイ」とおかみさんが側にある食ばんの残りを出す、婆や打笑ひ

「オホ、ランパンを云ふのは此のブリキの皿ですよ、おとわさま、

いつもの通りバターを敷きませうか」

おつ「ハイよく敷いて下ささ」



婆や紙でバターを敷く、おとわマッチをつけて瓦スツープへ點じ、中の温度を手で加減してランパンの肉の上へバターを載せてストープの中へ入れる、

おがみさんびつくり顔

「オヤモー火が起つたのですか」

おさわ「瓦斯だから火をつけければ直ぐ此の通りです」

おば「急ぐ時には調法です」

おて「それに臺所も汚れず小じんまりとして徳です」

おのみ「是れでは御見物に來た様なものです、何か私達に出來ます事を

おさせ下さ」

おさわ「此の干瓢を水でぬらして鹽で揉んで下さ」

おのみ「鹽で揉むと何うなります」

おさわ「爾うして其鹽を洗ひ落してゆでると直ぐ柔になります」

おのみ「オヤ爾うですか、干瓢は急に柔くならないものだと思ひました

おさわ「がそんな法がありませすか」

おさわ「竹の子や芋をゆでるのに糠を入れたり、豆を煮るのに昆布を

入れたりするのは昔んな早く柔にする法です、それからお隣の

おばさんとやらはそこにゆでゝあるお芋を搦鉢の中へ裏漉しに

して下さ」

「ハイ」とおばさん道具と搦鉢とを取りて裏漉を始め

「斯う云ふ風で宜う御座いますか」

おさわ「それで結構です、お砂糖を其中へ大匙五杯程入れてよく交せて

それから今度は梅干を此の位裏漉しにして一所に摺りませて下

さ」



おてつ「私は何を致しませう」

おさわ「あなたもそのお芋をうら漉しにしてお砂糖と少しの鹽と碾茶を

混ぜて下さる」

大原「僕は何を致しませう」

おさわ「あなたは玉子の白身を泡立て、下さる」

大原「幾つ」

おさわ「爾うです、十計り」

大原「玉子廻しは大得意です、お菓子をお焼きですか」

おさわ「ハイ、ケーキを拵へませう」

おてつ「お芋のうら漉しが出来ました」

おどわ布巾を取りて茶巾絞りの仕方を教へ

「斯う云ふ風に絞つてお皿へ載せて下さる」

おてつ「是れは何と云ふお料理です」

おさわ「お芋の茶巾絞りと云ひます」

おてつ「私の方は何うします」

おさわ「其儘お皿へ取つて置いて下さる」

おさわ「是れで食べられませうか、酸味と甘味ですから變で御座いませう

子」

おさわ「イ、エ味がよくつて第一胸に悶へません」

と自分は兜鉢にある玉子の黄身へ砂糖を一つ二つと數へて十杯入れ

「大原さん、玉子が立ちましたか、黄身の方は私が煉ります」

と砂糖を交せて煉り始め

「斯うして色の白くなるまで煉らないといけません、それからメリ

ケン粉十五杯と焼粉を小匙に二杯と斯うやつて中へふり込ます」



と粉ふるひを使つて見せる、  
かみさん驚き

「それは何と云ふもので御座います」

「是れは粉ふるひと云つて西洋のふるひです、粉をふるつて斯ういふ風にいれて牛乳をホンの此の位注して今度は泡立てた自身を入れますが大原さんその兎鉢を此へ出して頂戴、先づ三分の一ほど入れて粉を斯ういふ風にバラ／＼と振りかけて斯う軽く混ぜます」

「粉をふりかけるのは何ういふ譯で御座います」

「斯うすると泡が消えませんが、粉をふりかけずに入れるとすべり身いからまざりも悪るし泡も消えます、よく御覽なさいよ、今のがまざつたら其泡を矢つ張り前の通りに入れて斯うやつてま

せてモ一一度入れます」

と仕方を見せながら

「婆やさんブリキの型へサラダ油を筆で塗つて下さい、オット其前に型を火の上で温めて置かないと油がよく浸みませんよ」

と出来たる原料を匙で掬ひ一々型へ注いでストープの中へ入れる、  
大原此時

「おとわさん、今度は何を致しませう」

「爾うです子、今に宅から兄がシュークリームを皮を持つて参りますからクリームを立て、置いて下さい、クリームは来て居ませう子婆やさん、此へ出して頂戴」

婆や「ハイ」

と櫃に入れたるクリームを出す、おとわそれを兎鉢へわけて



「大原さん、クリームを立てるのは玉子の白身よりも面倒ですから、氣をつけて立て、下さい、少し立ちかけた處でお砂糖を入れますから」

大原 「ハイ、斯う云ふ風に立てますか」

おとわ 「イ、エ爾んなに最初から急に廻してはいけません、初めはやんばりと廻して段々速くするのです」

おきん 「それは全体何で御座います」

おとわ 「牛乳の上すみです」

と云ひかけてストープを開き

「モーお菓子が出来ました、婆やさん、是れをお皿の上へ明けて下さい」

と復た型を取りて原料を注ぎ込みストープへ入れる、

此時表より中川が先に立ち手傳ひ人々十餘人各々手に箱を持ちゾロゾロと重そうに入り来り、中川ツカと壘所へ進み

「大原君、大きに遅くなつたよ、僕はシューの皮を澤山家で焼いて来たが、早くクリームを立て給へ」

大原 「之を見て「これは、大變だ、何の位出来たのだ」

中川 「凡そ三千人前出来た」

と人々に箱を壘所へ運ばしむ、大原おとわに向ひ

「おとわさん、モー砂糖を入れませうか」

おとわは兄に黙禮しつゝ、

「ハイ私が入れませう」

と砂糖を入れ

「是れで復た立て、下さい、だがあんまり立て過ぎると固くあつて



バターになるよ、

と云ひながらケトキを出して復た仕込む、

中川は携へ来れるシユ一の皮を一々廣蓋の上へ並べ、

「大原君、皮が斯んかに澤山あるから少し位のクリームでは足りな

いせ」

大原「クリームはまだ澤山あるよ、婆やそつちの塚を皆んな此へ出し

て御覧」

婆やクリームの塚を澤山持ち来る

「斯んなにあるなら手を分けて大勢で立てたら宜からう」

大原「では皆んなに頼むとしやう、婆や兜鉢と玉子粥しを澤山出して

お呉れ、サア〜おかみさんもおばさんも皆んなで玉子粥しを

お始めなさい」

と一々人々に道具を渡す、お登和一々一同に教へる、

大原はクリームの鉢を婆やに渡し

「僕の分はモ一出来た、婆や、その大匙で此のクリームを皮の中へ

入れてお呉れ、ア、〜中々骨が折れる、草臥て腕が痛なつた、

ドレ一服遣りませう」

と座敷へ入りて障子をしめ、火鉢の前に座して煙草を二三服ふかす

折から表より小山夫婦入り来る、大原悦び顔に

「サア何卒此方へ」

と招する、小山座につき二禮し

「大きに遅くなつたよ」

小山夫「大原さん、今日は御両親がお國からお着きになるそうで、爾ら

すればあの一件も愈よお極りにありませうからマアお目出度う



御座いますネ」

大原ニコゝ顔

「左様さ、マアだけ餘計です、ホントに目出度いので」

夫人「オホ、大變なお勢ひです、時に大原さん、何かお土産を持って来やうと思ひましたが丁度修善寺の椎茸が着きましたから少し計り持つて参りました、今日の御料理に何かお使ひ道がありませう」

と風呂敷包より竹かごを出して前に置く、大原手に取り打眺め

「是れは難有う、修善寺の名物蝶花形、早速おとわさんに願つて晩の御料理に來ひませう」

と手に取つてよく捨める、

小山夫人は尙ほ包みの中より小壘と紙袋を澤山取出し

「大原さん、是れはわなたへのお土産と思つて懇々取寄せて持て参りました」

大原「何で御座います」

夫人「玫瑰散と云ふ齒磨きに都の艶と云ふ洗ひ粉で此節大層流行るものです」

大原「それは難有う御座います但し一度も洗ひ粉あんどを使つた事がありませぬ、僕に洗ひ粉とは少し妙ですな」

夫人「それだからいけないのです、私共夫婦が是れ程に心配してお登和さんと貴郎の中を周旋して居りますのに貴郎はサッパリ身の廻りをお構ひなさらず、髪はいつでもボウ／＼としてお顔なんぞは色のお黒い處へ脂ぎつてぢ／＼ひさく見えます、ナニも態とおしやれなさいとは申しませんが男だつても身奇麗にキチンと



して居なければ若い人に嫌はれますよ、誰だつてきたないのよ  
 り綺麗な方が好いではありませんか、御両親がお着きになれば  
 すぐにも御婚禮おさるのでせうに貴郎がきたならしくしていら  
 しつてはおとわさんがお可哀想で御座います」  
 大原深く思ひ當る様に

「ナ、ナール程、それで漸く解ました、おとわさんの眞實はよく  
 存じて居ますけれども何處にかまだ薄紙一枚程の隔てがある様  
 なのは全くそれが爲でしたな、至極御尤もの仰せ、以來は心を  
 入れ換へて身の廻りを奇麗に致しませう、お心を籠められ此の  
 洗ひ粉、早速一つ使つて見ませうか。  
 と袋を取つて立かゝる、  
 夫人「ア爾んなに急ぐ事はありません、オホ、大原さんも中々現金

ですネ、時に御料理の方は」

大原「今處所でおとわさんや中川君が遣つて居られます、僕も暫く手  
 傳ひました草臥れたので暫時休息の形ちです」

夫人「では私もお手傳ひ致しませう」  
 と立上る、小山も

「僕も一つ拜見しやうかね」

と二人して臺所に入り、間の障子を締める、大原跡に首をひねつて  
 暫く思案の体なりしが忽ち立つて柱にかけたる鏡を持ち來り長火鉢  
 の上へ置き片手で支えて頬に我が顔を眺め杖よりハンケチを取出し  
 て急にセッセと額の脂を拂き始める、纏て戻かしくやなりけん、子  
 杓立てを突張りにし危き様に鏡を立頬や額を撫で廻して居る中に剃  
 り残りの髭を見付けて頬に引張り、忽ち火鉢の抽斗より毛抜きを取



出して二三本の毛を引抜く、其度びに頬を膨らせ手でさすり、抜く時は痛そうに顔する、三度目に引抜く力餘りて鏡に觸れればガラ／＼と音して鏡は倒れ子杓立ては下へ落ちる、大原動て、子杓立てを押へながら人や見ると後ろを振り向き今度は音を立てぬ様にそつと子杓立てを直し其の突張りに茶こぼしを置き復た鏡を立て、頬に顔を眺める、纏て自分の髪に氣が付いて手で撫でけるが癖の直らぬと見えて火鉢の抽斗より西洋櫛を取出したり、滅多に使はぬと見えてはこりだらけなるを大原は顔より遠ざけてフツ／＼と二三度吹き其儘髪を梳いて見るに乾ける髪は癖直らず、大原は鐵瓶の湯を前の茶こぼしに注ぎ、櫛を突込みて我が髪を撫でければ濡り氣にて漸く自由となりけるにや丁寧な左右分けて一生懸命に撫で付ける、あはれ立派な男となりけり、今度は頬に威容を正し、先づ襦袢の襟をかき

合せて下着下着を揃えけるがフト氣がついて羽織の紐を見るに一本長く一本短くて揃はねば一度はききて結び直す、斯くてよく双方を見較ぶれば矢つ張り長短不同あり、復たといて結び直し、復た氣に入らぬとてはきき二三度四五度結びても自分の氣に入らず、果ては疳癩粉れに荒々しくグイと引きはききカンを外して下に置き丁寧に揃えて幾度も結び直し未漸やく氣に叶つた様子にてカンをかけ下を引張り上を揃えグツと身を反らして身體を左右に振つて見る、前の方は整ひたり、今度は後ろと少しづつ、身體を曲げて鏡に襟を寫しながら腰を立て手を延ばして段々身體を曲げ奴風の様な風となつて無理に後ろを振り返り妙な身振や奇妙な顔をなせし途端今迄寮所にあつて料理をなし居たるおどわがスーッと障子を開き思はず此體を見て打驚き



「大原さん、何をしていらつしやいます」  
と聲かけられて大原驚きおどわの顔を見るや

「ヒヤー」

と云つて顔をかゝえ下を向く、おどわ譯分らず

「全體何うなすつたのです」

大原愈よ顔を我が袖へもぐり込ませ苦しそな聲して

「ウム、い、穴でもありませんかその邊に」

おどわ

大原「僕の入る様な穴は、ウム苦しう」

と呻つて居る、此聲の小山も夫人も中川も臺所より出で来る

小山「大原君、何うかしたのか」

中川「復た食べ過ぎて腹でも裂けたか」

夫人「おどわさん、大原さんは何うなすたのです」

おどわ「何うなすつたのか存じませんが今此を明けましたらば子、オホ

、何だか妙なお顔をなすつてオホ、」

と可笑しそらに笑ひ出す、大原頭を抑へたまゝ片手で制す真似して

「モ〜〜何卒其事は、オ〜苦しう」

と中腰に立つて奥の方の壁傳ひに臺所へ逃げ出し、一同見送り

小山「何だか可笑しいネー、今迄ボー〜して居た頭が大層氣麗に撫

で付けてあつて、ラ〜〜光つて居るせ」

中川「オヤ此に櫛もある」

小山「鏡も立てかけてある」

夫人「オホ、分りましたよ、おどわさん、あなたに嫌はれまいと思つ

て今急におめかしをなすつたところです」



「あらイヤあ」  
と愧かしそな素振、夫人は臺所に向ひ

「大原さん、早く出ていらしやいよ、今お登和さんがあなたに食べさせ度いと云つて出来たお菓子を持つて来た處です、肝腎の御主人様がいらつしやらなくつてはお茶を飲む事も出来ません」

大原はやう／＼勇氣をこして面目無氣に出で来りしがおどわと顔を合せぬ様に態と横向きに坐し

「ア、實に苦しかつた、飛んでも無い處を見られて了つてイヤハヤ何うも」

と頭をかいて居る、臺所より婆やが茶を點れて来る、一同茶を飲み菓子を喫しながら

小山「時に大原君、今日いらつしやるのは君の御兩親計りかき」

大原「多分爾うだらう、僕が四五日前に委しい手紙を向ふへ出したら突然今夜其地へ着くと云ふ電報が先刻届いた、多分老人達の氣せはしくつて手紙を見ると嬉しさの餘りに直ぐ國を出たのだらう」

小山「然し君の故郷には許嫁の娘があると云ふではないか、その方は何うした子」

大原「それは何でも無いよ、僕の叔父が僕に従姉妹を押付けやうとして居るのさ、僕が國にでも居ると無理遣りに押付けられるのだから」

小山夫人「何れ別さんでせう」

大原「イヤハヤ大變な別」

夫人「おどわさんも少し御心配ですき、その娘さんが今日御一所にい



らしつたら大變な事になりますよ」

大原「イヤハヤ桑原々々」

小山「然し向ふでは君の奥さんになる氣で居るだらう」

夫人「なる氣どころですか、モ一なつた氣でせう、おどわさん御用心をなさいましよ」

大原「モ一ひやかすのは好い加減にして下さい、僕はソロ／＼出迎ひに参ります」

と火鉢の側にありし袴を執りて穿かんとする、小山夫人お登和を顧み

「お登和さん、後ろから袴履しをつけておあげなさい」

おどわは立ち度ぐもあり立ち度くも無し、極まり悪そうにもビクして居る

夫人「モ一お登和さん」

と押されてお登和は立ちけるが大原の側へ行きかねて忽ち臺所へ逃ける様に引込び、其内に大原は獨りで袴を着す、小山夫人つく／＼眺め

「おめかしの甲斐があつて大層立派な旦那様におなり遊ばした、斯う云ふ所をお登和さんに見せなくつてはいけません、おどわさん早くいらしつて御覽なさいよ」

おどわは返事もせずしてシユ一の皮へクリームを詰めんとしけるが心此にわらざれば迂つかりクリームを外へこぼし、あはて、布巾拭いて居る、

大原身仕度をして

「では諸君、よろしく臺所の方を願ひます」



と勢ひよく表へ出でけるがおとわの様子に氣になると見てはつと庭口より臺所の方を覗く、おとわも大原の姿を見んとてや、片手に匙を持ちながら首を延ばして表を神く、互に顔を見合はせておとわはハツと後ろへ引込む、大原はニヤリと嬉しそうに笑ひ門の外へ出ながら

「ア、難有いな、實に難有いな、あの位な淑女が僕のワイフになると思へば僕は實に果報者だ、然し先刻は弱つたよ、大原さん何うしたのですと云はれた時には實に穴へでも入り度かつた、だがあゝいふ所を見られてもその眞實が以前に變らないから頼もしい、今此方を出て居た様子などは實に千萬無量の情がある、御両親がお着きになつたら早速婚禮を済ませて、コレおとわや、クリームを立て、お呉れと一日も早く言つて見度いな、ウフ、チエース

ト

と路傍の石に腰かけて巻煙草を吹かし始める、此時花道より大原の両親と叔父夫婦と娘お代と五人田舎出の姿で出て来る、

母は娘を顧み

「お代や、東京と云ふ所は賑か所だらう」

お代ケゲンな顔をして

「ナントマアたまげたこんだのう、鎮守様のお祭禮よりもゑれいな

ア

と云ひながら手バナをカム

親の父「コレさ、大原文學士の奥さんともなる人が手バナをかむのは見つとも無い、少し行儀を好くしないと外の人に笑はれるよ」



母「ホントに和女だつて立派な奥國になるのだから少しお氣をつけなさい、文學士と云へば村の村長さんよりもエライのだよ、村長さんどころか郡長さんよりもエライのだよ、その奥様にゐると和女は毎日馬車と云ふものへ乗つて方々歩かなければならぬ」

お代「八の戸さあ通ふ馬車の様にブー〜と喇叭を吹いてかゝる」

母「アレは田舎の圓太郎馬車だ、和女達の乗る」は黒塗馬車と云つて國の知事様さへ滅多に乗れぬ位な立派な馬車だ、家だつて知事さまのお屋敷より大きいに違ひ無いよ、チー貴老」

と叔父を顧る、叔父も頷き

「爾うさ、苟も大原文學士だもの、西洋館か何かだらう」

と云ふ側で大原の父

「ですが、今の内はまだ學校を卒業したて、爾んな家へ入る事も

出来ません」

の大原「お代と婚禮が済めば大きな家へ入らなければなりません、モ」

「此の町が満の家のある處でせう、まだ先までせうか」

お代「満さんの家は何處だんべい」

とゾロ〜歩み行く、

向ふより大原が下を向きながら

「ア、嬉しいなわ、御両親にお登和さんを見せたら是れは和郎に過ぎものだなんぞと被仰るだらう、毎日お登和さんのお料理を差上げたら何んなにお悦びになるだらう、ア、難有い〜」

と後ろ計り振り返り前より人の來るを氣がつかず、忽ち双方行き違ひ大原は先づ両親と叔父夫婦を見て

「コレはお早いお着きで、オヤ叔父様も叔母様も御一精で」



と打驚く風体、両親の後ろより

「満さん」

と飛出していきなり取すがるお代嬢、

大原は思はず

「ヒヤ」

と云つて後ろに飛退き稍暫らく呆れ顔

「お代さんが御一緒に」

と不平らしく云ふ、お代の母

「満や、お代も好い娘になりましたらう、

和郎が國へ歸つた時分と違つて見違へる様になりましたらう」

大原「ハイ」

と不性無勝に云つた切り、

叔父ある人が

「和郎の家は何處だえ、あの大きな石の門のある屋敷かえ」

大原「イ、エあの二三軒先で」

叔父「あの先は少なな家計りしじやないか、免に角早く行かう」

と歩み出す、

大原「マア少しお待ち下さい、何卒ゆるゆると跡から来て下さう」

と云ひ捨て一散に驅け戻り、

「小山君、大變だ、君が悪い豫言をしたものだから僕の従姉妹が出

て来た、早くお登和さんを歸して呉れ給へ」

と云ふに

「ソラ大變」

と家中大騒ぎ大マゴツキ



お登和は裏口よりそつと出て行きすれ違ひに人々に逢ふ、  
お代早くも認めてウムと呪め母に指し

「われはアンだんべイ」

と云ふ母も不思議顔してその後姿と見送りながら一同家の中に入る、  
お登和は遠くより様子を伺ひて去りもやらず、大原はてんでこ舞つ  
て爲す所を知らず、座蒲團が足らぬとて臺所の悪きものを持出すや  
ら臺所では小山の夫人と老母どがお代嬢の姿をのぞいて窓に笑ふや  
ら、

其内來客は狭き室に座を占めたり、

お代はいさなり大原の側へベタリと寄り添ひ

「浦さんは好い男になつたのう」

大原氣味悪るさうに身を離す、大原より一場の移換濟めば叔父ある

人々大聲に

「時に浦や、和郎が卒業して國へ歸つて來たら此のお代と婚禮させ  
て初孫の顔を身皮いと楽しんで居たが和郎が中々歸らないのに此頃  
聞けば東京で世帯を持つたとの事、それならば丁度幸ひお代を一  
所に連れて來た、早速にも婚禮を済ませる様に支度をしたら宜か  
らう」

大原「ウム、」

と行きつゝ、

大原の母進み出で

「浦や、今裏口の方から出て行つた娘は何だえ」

大原下を向き

「アレハ友人の妹で」



お代妙な身振りをして嫉妬らしく

「それがその長崎とかのおまつちよけえ

大原「ウム、」

と居た、あれずして席を立ち臺所へ往きて小山の妻君に

「奥さん、何うしたら宜いでせう」

と泣聲にて云ふ、

小山夫人も可笑しさを堪く

「大變です、何は兎もわれお二人のお客が五人になつたのですか

ら御馳走を出すにもお膳から足りません」

大原「仕方が無いから何處へか借りに行きませう、」

と座敷へ戻りてそつと立出でんとするにお代嬢袖をひき

「満さん、そこへ行くだ」

大原頭をかゝえ

「鳥渡そこまで」

と逃げる様に飛び出してホット息を吐きながら歩む向ふにお登和嬢のありければ

「お登和さん、只今は誠にお氣の毒なまで」

お代「い、エ何う致しまして貴郎こそ無お困りで御座いませう」

と睦文と氣に話しをする、

お代門の内より遙に眺め

「ア、ア、満さんがあまつちよ」

と大聲にぞなる

大原とお登和驚いて逃げ出す、幕



貳●目 食道樂會の場

正面は廣海子爵家庭園の体

花道より大原とお代嬢出て来る、大原は成るべくお代嬢と並んで歩かぬ様にセッセと先へ行く、お代嬢は成るべく大原と並んで歩き度さ身振にて頻りに側へ寄添ひ

「満さん、少し待つてよ、爾んなに早く歩いちやわ仕様が無いのよ、アタイはモー足が草臥れちやつたわ、と重そうに足を引する

大原澁い顔して振返り

「お代さん、その口の利き様は何の事です、折角田舎言葉が少し直りかゝりかと思つたら齒の浮く様な女學生言葉、待てよとどか、

アタイは草臥ちやつたわなんぞと云ふのは舌の廻らない、子供か或はガエンの言葉です、女は女らしい口を利用して丁寧な言葉を使はなければいけません、自分の事はわたくしと被仰い、草臥れちやつたと云はずに草臥れましたとか草臥れてしつたとか仰被い、その調子で今日の園遊會へ出られたら僕も實に閉口します」

とウンザリした風に立留まる、お代はつんとすねて見せ

「イヤだよ人は、何ぞと云ふと小言べえ云つて、アタイはもつと近いとこだと思つたら何ぼうマア遠いんだらう、少し此らで休むべいか」

大原も苦笑ひし

入れ交りの言葉だから一層溜まらない、モー直ぐ此の先ですから我慢してお歩きなさい、あなただつて田舎に居る時なら二里や三



里の道は何でも無いでありませんか」

お代 「だつても東京さあ来れば満さんと一所に馬車へ乗つて歩くんだつて母さんが爾う言つたわ、馬車で無くつても人力でも宜わ」

大原 「アハ、爾んな事を想像して國からおいでだから實に閉口します、それは子、急用があるなら人力へでも電車へでも乗ります、今日は廣海子爵の食道樂會、軍國多事の世中故勤儉質素の大意を、外見やおしやれに遺ふ金があるなら食物を改良して居る位です、力體力を養はなければなりません、運動するのは身體の爲めです、モ一少しだからお歩きなさい、」

お代 「つまらないわ、家へ歸つた方が餘つ着宜い」

大原 「それは僕が願ふ所です、お歸りになるなら早速人力を雇ひませ

う」

お代 「獨りじやイヤだわ」

大原 「僕は今日の會員ですから歸る譯になりません、全體あなたは何だつて今日の會へ連れて行つて呉れるとお云ひのです」

お代 「だつても満さんを獨りで出しちや心配だものあまつちよも今日は来るだんべい」

大原 「少し不愉快な顔」

「復た妙な事を被仰る、あまつちよとは誰の事です、僕は爾んな人を存じません」

お代 「あのソラ中川さんどこのあまつちよ」

大原 「あのおとはさんの事ですか、今日はお手傳ひにいらつしやるでせう、あの人居れば何うなのです」



お代 「何うなのつて、にくらしいわ、己らが見ねいと二人で何をするか知んねえ」

大原 復た苦笑し

「段々言葉が後戻りしますよ、向ふへ言つて己らがなんぞと國言葉をお出しなすつては困ります、何卒此から歸つて下さる」

お代 「歸らねえよ」

大原 當惑の様子

「それならば向ふへ行つてから萬事僕の言ふ事を聞いて行儀好くおとなしくおさいますか、僕に耻をかゝせる様な事があるとモ一何處へもお連れ申しません」  
お代 「満さんがわのあまつちよと口を利かねいと言つたらおとなしくするわ」

大原 「イヤハヤ往生かんねん佛、成るたけ口を利かずに居りませう」  
お代 「成るたけじやいけねえ」  
と言ひ争つて居ると向ふの方の横丁から小山夫婦出で來りて此方を顧み  
小山 「ヤア大原君、早かつたね」  
夫人 「オヤお代さんも御一所で」  
と驚いて居る様子、大原は言譯らしく  
「だつても御本人が是非今日の會合へ出度いと被仰るから」  
夫人 「お代さんも威心なお心掛におなりですね、斯う云ふ會へお出な

されば段々世間の事が分つて來て大原さんも大きに御都合が好くなりませう、お代さん、サア御一所に參りませう、當世流行の大きな束髪におなりでよくお似合ひですね」



お代ちよいと頭へ手を遣り

「よく似合つて」

と嬉しそうな身振、大原澁い顔をして横を向く、

四人は廳で庭園内に入れり、庭園中には先程より洋服着たる若紳士  
煙草を口に咬へながら獨りで彼方此方と運動してわりけるが一同を  
見て此方へ來り

「イヤ小山君御夫婦に大原文學士、よくこそお揃ひで、僕は先刻か  
ら此へ來て居るけれどもまだ會員が誰も見えぬから退屈して居た  
とこです、先づ此方へおかけなさい」

と四脚の椅子を前へ寄せて四人を座せしめ

「時に大原君、こなたは君の御夫人ですか」

とお代に挨拶せんとする、大原當惑そうに

「イヤ僕の親戚で、お代さん、是れは高襟磨さんですよ」  
と双方を紹介する、紹介されてもお代は口を利くべき道を知らず  
「ビエー」

と云つゝ少し頭を下げた切り、高襟磨に輕蔑の笑ひを含み

「大原君とはよくお似合ひですから僕は御夫人かと思つた」

大原獨り言の様に

「ひどい事を言ふ」

と下を向く、

上手よりお登和と玉江嬢と出で來り、

玉江「お登和さん、小山さんと大原さんがいらつしやいました、早く  
參りませう」

お代「イヤ爾うですか」



と二人とも足を速めけるが玉江フト立留まり

「あすこにイヤお人が居ますネ、あの人は私の側へ計り来て蒼蠅くつて仕様が御座いません、今日は二時間も前から来て居て臺所をお手傳ひ申しませうの何のと云ふのですもの、今に誰か来ませうから庭でお待ちなさいと待たせて置いたのです、後生ですからおどわさん先へ行つて下さり」

「オホ、」

と笑ひながら先へ行く、

高橋は此時小山夫人に向ひ

「奥さん、近頃は如何です、婦人會の方へもわんまりお出かけになりませんか、我輩は先日海老茶會から招待を受けましてネ」と話しかけて後ろを振り返り玉江嬢の姿を見るや話しの先は何處へや

ら忽ち立ち上りて上手へ進み

「イヤ玉江嬢、お待ち申しましたよ、チア何卒あちらへ」

と備へ寄つて手を執らんとす、玉江はおどわを楯にして逃げ廻り

「モト決してお構ひ下さいますな」

と先へ走りて

「小山さんも大原さんもよくお早く」

と來客に挨拶する、お登和も横いて進み出で會釋せしがお代の居るを見て前へは進まず、玉江嬢も變な顔してお代を眺めけるが大原は別に紹介せんとする気色も無く、只モヂ／＼して困つて居る様子、小山夫人は氣轉らしく

「玉江さん、是れは大原さんの處のお代さんで」

と先づ玉江嬢に紹介し



「お代さん、是れが御當家の令嬢です」  
と紹介すれどもお代は矢つ張り前の如く

「ヒエー」

と顔を下げたるのみ、此間に高襟は一脚の椅子を大原の側へ置きて

「チアゝなた此方へ、チア何卒」

とおとむを強いて席に就かしめ、それと並べて又た一脚を置き

「玉江さん此方へ」

と着席を促す、玉江は何心無く其椅子に着く、高襟は獨り嬉しそら  
に一脚の椅子を玉江の側へ持ち出してビタリとつけ、自分も腰掛け  
て妙に玉江の方へ寄り寄る、玉江は不意に驚いて椅子を少し下手へ  
すするに下手のおとむ嬢も是れに驚かされて大原の方へ椅子を進める  
大原の方からも少しづつ、椅子を寄せて互に顔を見合せ物も云はずに

ニツコリ笑ひたるが先程より二人の椅子を脇目も振らず見て居たる  
お代はグイと力を入れて大原の椅子を自分の方へ引く、引かれたる  
まゝに大原は椅子の後ろ脚のみお代の方へ寄せければ前よりも一層  
おとむと差向いの位置になる、お代は愈々腹立たしく今度は大原の  
椅子の前の方をグイと引く、椅子は引かれても大原は腰を据へかへ  
て矢張りおとむの方計り向いて居る、

此様子を見て小山夫婦は互に指さし笑つて居る、  
此時奥の方より中川が瓦斯七輪を持ち出て来り

「諸君お早う」

と會釋しつゝ庭の中央へ据え付け其位置を直しながら

「大原君、失敬だが此へ来て手傳つて呉れ給へ」

と呼ぶに大原は好き機と云ふ様子にて席を立ち中川の側へ来る、



小山も

「僕も手傳はう」

と出で来りぬ、七輪の据付終りたれば、今度は一同が手傳ひ合つて裏口より大きなナイブルを持ち来る、その上には鳥一羽と外に料理の材料鍋等あり、中川上の物を配置せんとて二つ三つ手をつけ、

「どわちやん、此へ来て見てお呉れな、僕には少し分らん事があるから」

と妹を呼ぶ、おとわも立つてナイブルの側へ来り品物を配置して二つの鍋を七輪へかけ、一つには梅干を入れ、一つには鯛の身の鹽にしたるを入れる、大原側へ寄り

「それは何うなさるのです」

「是れは戰地食物にする甘露梅と鯛の力煮です、今の仕上げをし

ますから斯うしてゆで、置きます」

大原はお代の事を忘れて以前の様な心持になり

「では僕もお手傳ひ申しませう」

と側で世話をやく、遠くより此様子を眺めてお代は悔しそりに立つたり居たり延び上つたりしてもがいて居る、玉江は高襟に話しかけられるが羞しと云ふ様子にておとわの椅子へちよいと席をかけた「お代さんとやら、今日はよくおいでになりましたネー」と言葉をかける、お代

「ヒエー」

と返事をしながらも顔は玉江に向かすして頬におとわと大原の方を睨めて居る、

斯る處へドヤ〜と會員五六人入り来りけるが一同互に會釋しつゝ、



中なる一士官先づ進みて大原の側へ寄り

「ヤー大原君暫く、僕は遠方へ行つちよつたから久しく君に逢はなかつたよ先日出張先で誰にだか聞いたのだが君は御友人の妹の才色兼備な淑女と結婚する筈だと云ふ事じやつた、何にしる實に目出度い事だ、モ一その御婚禮は済んだか」

と軍人風の率直な言葉、大原は返答し兼ねて黙つて居ると、軍人の後ろから年若き夫人が袖を惹き

「また御婚禮が済みませんがそこにいらつしやるおとわさんが未來の大原夫人ですよ」

軍人

「ヤア爾うですか」

とおとわの前へ進み

「僕は勝田進と申して大原君とは中學時代の舊友です、何分何卒お心安く」

と人の夫人へ挨拶する様な口振り、おとわは顔を紅くして黙つて後ろへ引込む、軍人は別段人の機子に氣も留めず

「大原君、君は實に幸福じやなわ、アハハ、」

と高笑ひする、

此時までお代は椅子より延び上つて此方を睨めてありけるが憤怒の形相にてツ、立ち上り

「満さーん、此へ來ねいかヨ」

と叫びぬ、一同驚いて振り返りしが丁度上手より主人の廣海子爵出て來り人々に挨拶する、

挨拶終りて子爵は人々に向い



「今日は軍國の爲め出征軍士へ送るべき戦地食物の調製法を實習しやうと思ひます、丁度此にいらつしやる勝田君から先日色々な話しを伺ひましたが戦地では烈しく働くから生理上の作用で妙に甘い物が欲しくなる、上戸でも菓子ばかり有様だ、それに行軍すると喉が渴いて酸い物が欲しくなると斯う云ふお話しであつたから中川さんと相談して誰にでも出来る様な梅干の甘露梅を拵へる事にしよした、上等の甘露梅は生梅から製するので面倒ですけども軍人の御家族方が手製にあさるには梅干の方が軽便です、それにもし一つ魚の力煮と云ふものも戦地へ送るに適當ですから今此でおとわさんがその製法を實習されます、それが済むと戦地へ送るべき力餅を拵いて御覽に入れます」

小山夫人は見物の爲め立ちて此方へ来る、お代のみしよんぼり椅子

にかけて居る、大原は一旦お代の方へ行かんとせしが途中に立止つて遠くより料理場の方を眺めて居る、お登和嬢は火にかけ置きたる鍋をどりて湯をこぼし

「是れは最初梅干を一時間水に漬けて置いて一度ゆでこぼし、斯う云ふ風に裏漉しにします」

とテーブルの上で裏漉しにし再び鍋へ入れ

「是れへお砂糖と水飴を入れて氣長に斯うかき廻しながら煮て居ると誰にでも出来ます、味の好しあしは砂糖や水飴の入れ加減次第です、是れで仕方はお分りになりました、今度は鯛の力煮を致します」

外の鍋にありたる鯛の身の小さく切りたるを揚げて布巾で絞

「是れは最初鯛の身を三枚に卸して小さく裂いて強の鹽をまぶして



一時間置きます、それを水で洗つて今迄ゆでたのですがゆだつたら斯ういふ風に布巾で絞つて搾鉢の中でコック／＼突いて居れば織緯が綿の機になります、これをコー鍋に入れて醤油で味をつければ直ぐ出来です」

と鍋を卸し小皿へ取りて人々に少しづつ試食せしむ、

軍人「是れはうまい、斯ういふものを飯へかけて食へば外の菜はいら

ない、是れなら長く持つでせうネ」

中川「幾日でも持ちます、でんぶも同様なものです」

外の人々も皆な賞翫してその美味なるを褒める、

「戦地では食物を貰ふのが一番楽しみだそうです」

「どころが途中で腐るものや、容量計り大きくつて中身の寒いものは持ち運ぶに不便ですが甘藷梅や力煮なら籠にでも出来て送るの

に便利です」

「私の兄弟が出征して居りますから早速拵へて送りませう」

「是れは鯛の身に限りませうか」

中川「イ、エ、コナでも鱈でも身の固い魚なら何でも出来ます」

軍人「斯ういふ風に國民が内より後援を與へて呉れるから我が軍隊の

勇氣は百倍するヲ、僕は食物其物よりも食物中に籠つて居る國

民の熱誠を軍隊の人に味つて貰ひ度く思ふヲ」

と互に少しづつ試みる、廣海子爵大原に向ひ

「時に大原君、あなたに一つお願ひがあります、戦地の人々に力餅

をついて送り度いと思ひますがあなたの大力で一つウツンとついで

下さいませんか」

大原頭をかき





(四六)

「エライ役目を仰せ付かりましたな、然し餅をつくのには僕よりもお代さんが大得意ですからお代さんに餅をつかして僕はコチ役にありませう」

子爵手を打ち

「意よ妙です大賛成、是非何卒お代さんに願ひ度い」

中川は給仕等に命じて臼と杵とを持出さしむ、大原お代の側に行き

「お代さん、此で今餅を搗いて戴き度いのです、ドウゾ一つ腕を振つて下さいませんか」

お代は今迄の權幕に引かへて急にモヂくし

「餅をつくのけえ、耻かしいなあ」と頭をかく、

大原「だつて餅搗きはわたしの御得意ではありませんか」



お代「國で餅を搗きや誰にも負けねえけんぞ」  
 大原「だからその腕前を皆んなに見せて下さす」  
 お代「ちつとんべいついて見やうか」  
 と妙な身振をして大原と共に臼の前へ来る、中川等給仕に命じて瓦  
 ストップの上に乗し居たる蒸籠を取り臼の中に糯米を明けしむ、  
 お代「餅は最初にこづくのが肝腎だ」  
 と杵をとりてつき始む、大原これぞりをする、聽て餅が出来上るに  
 見物の人々ヤンヤとお代を褒める、お代得意になり  
 「モー」と白もつくべいか」  
 と云ふ、料理の實習終りて廣海子爵は  
 「諸君、食堂は此の後ろに出来て居ますから何卒あちらへいらしつ  
 て下さす」

と自ら先に立つて案内する、一同ゾロゾロとついて行く、一番後れ  
 て大原がお登和の跡より行かんとしければお代飛出して  
 「満さん、何處へ行くだ」  
 大原「食堂へ参ります、あなたも一所にいらつしやう」  
 お代「イヤだ、あまつちよの側へあんず誰が行くもんか、あのあ  
 まつちよはしふていよ、満さんの女房氣取りで挨拶して居るだ  
 もの、今に見て居ろ、只は置かねいから」  
 大原「アアサ、爾んな事を言つては困ります、家へ歸るのなら歸りま  
 すし、此に居るのなら食堂へ行かないと人が可笑しく思ひます  
 よ」  
 お代「何と思つたつて構ふもんか、モー、ひとりじや満さんを何處へ  
 も出せねえ」



と袖を掴んで何うしても放さず、大原は途方に呉れて居る、奥より出で來れる小山夫人

「大原さん、何をしていらつしやる、お代さんも早くいらつしやい、人数が揃はあいとお料理を出す事が出来ません、オホ、復た夫婦喧嘩でもなすつたのですか」

と斯う云はれてお代は始めて笑顔を作り

「ハア夫婦喧嘩よ」

とニツコリ笑つて女房氣取りで大原の手を取り小山夫人と共に奥へ行く、大原頭をかきあがらしはくとしてついで行く

此の跡に權助と書生出で、料理の品物を片付ける、

花道より號外くと鈴を鳴らして出で來る男あり、その跡より威勢の好き妻したる號外賣り驅け來り

「オイ、おめへの持つて居る號外を半分此方へ分けて呉れまいが、僕は社へ行つたけれども人がこんで居て急に取れぬよ」

前の男「ドゥして、やつと是れだけ取つたのだ、お氣の毒だが分けられぬよ」

後の男「分けた方がお互に宜いじやねえか、おめへがそんな氣の無い聲を出して號外々々と獨りで賣つたつて何うして賣れるもんか、號外は何でも大勢で號外々々と怒鳴りて歩かなくつちや賣れぬいんだ、おめへはまた新めいな」

前の男「成程、それも尤もだ、じや分けやう」

と紙敷を敷へる時車夫一人進み來り

「オイ、今の話しを聞いたら號外を賣つて見度くなつた、一つ仲間へ入れて呉れぬいか」



後の男「車屋さんかえ、今日の號外は賣れるが、遣つて見ねえ」  
 前の男「じゃ三つに分けやう」  
 と二人へ渡して號外「と以前の様に呼んで歩み出す、  
 車夫も其跡につき」  
 「ゴガイ……………ゴガイ」  
 と小さな聲で初心らしく言ふ、  
 後の男笑ひ出し

「アハ、爾んち事じや賣れねいや、サア二人とも僕の跡へついて  
 來給へ、號外賣はドシ〜騙け出してせはしそらに三聲づゝ怒鳴  
 らあくつちやいやいな」  
 と號外を高く差し上げ  
 「アリヤ〜號外〜、報知新聞號外、大勝利號外」

と勢ひ込んで騙けて行く、二人も其の真似をしてついて行く、  
 廣海子爵奥より現はれて給仕を呼び  
 「コラ〜號外の聲が聞える、一枚買つて來」  
 給仕騙け出して

「オーイ號外や」  
 と呼び留め一枚買つて子爵の前へ持ち來る、子爵の後ろより軍人と  
 高襟其他の人々ゾロ〜出で來る、  
 子爵號外を眺め

「ナニ、報知新聞倫敦特電と、昨日日露の兩軍沙河附近に會戦し、  
 日本軍大勝利を得たり……………」  
 と讀み上げるに外の人々  
 「萬歳」



「萬歳」

と一同悦ぶ

軍人「連戦連勝で實に目出度い、諸君是れから戦捷踊りを始めませう」  
一同「賛成々々」

「大賛成」

と戦捷踊りになる

戦捷踊りのトンヤレ節

トコトシヤレトシヤレナ〜

あれは何じやえ露助さん、ツン〜瓜をどぎ立て、満州朝鮮支那  
印度、隣りの領地をねらつても、ひーかりかゝやく日本の、旭の  
御旗に逢ふ時は、腹い朝露ホロ〜と消えてつた、トコトシ  
ヤレトシヤレナ

トコトシヤレトシヤレナ〜

あれは何じやえクロバトキン、キン〜キンリの大將軍、ウラー  
〜の掛聲で、シベリヤくんだり出て來ても、ひーかりかゝやく  
日本の、旭の御旗に逢ふ時は、春の村雨バラ〜と逃げてつ  
た、トコトシヤレトシヤレナ

トコトシヤレトシヤレナ〜

あれは何じやえ旅順港、砲臺軍艦居並んで、鐵條網に速射砲、難  
攻不落と威張つても、ひーかりかゝやく日本の、旭の御旗に逢ふ  
時は、野路の白玉コロ〜と落ちてつた、トコトシヤレトシ  
ヤレナ

トコトシヤレトシヤレナ〜

あれは何じやえゴザツク兵、ひーかしひかしの軍人、大きな馬に



長い槍、曲乗りかけつこ上手でも、ひーかりかやく日本の、旭  
の御旗に逢ふ時は、嵐に木の葉クルくくと舞つてつた、トコ  
トシヤレトシヤレナ  
正義の前に敵は無し、進んで行くのは人の道、驕る露西亞を打破り  
世界を平和に導いて昇る旭の日本國、幾千年も萬年も榮ゆる御世こ  
そ目出度けれ、



4/5/38

明治三十八年二月十三日印刷  
明治三十八年二月十六日發行

正價金貳拾五錢

著者兼發行者 村井寛  
神奈川県相模國中郡茅渚町  
三千五百六十九番地

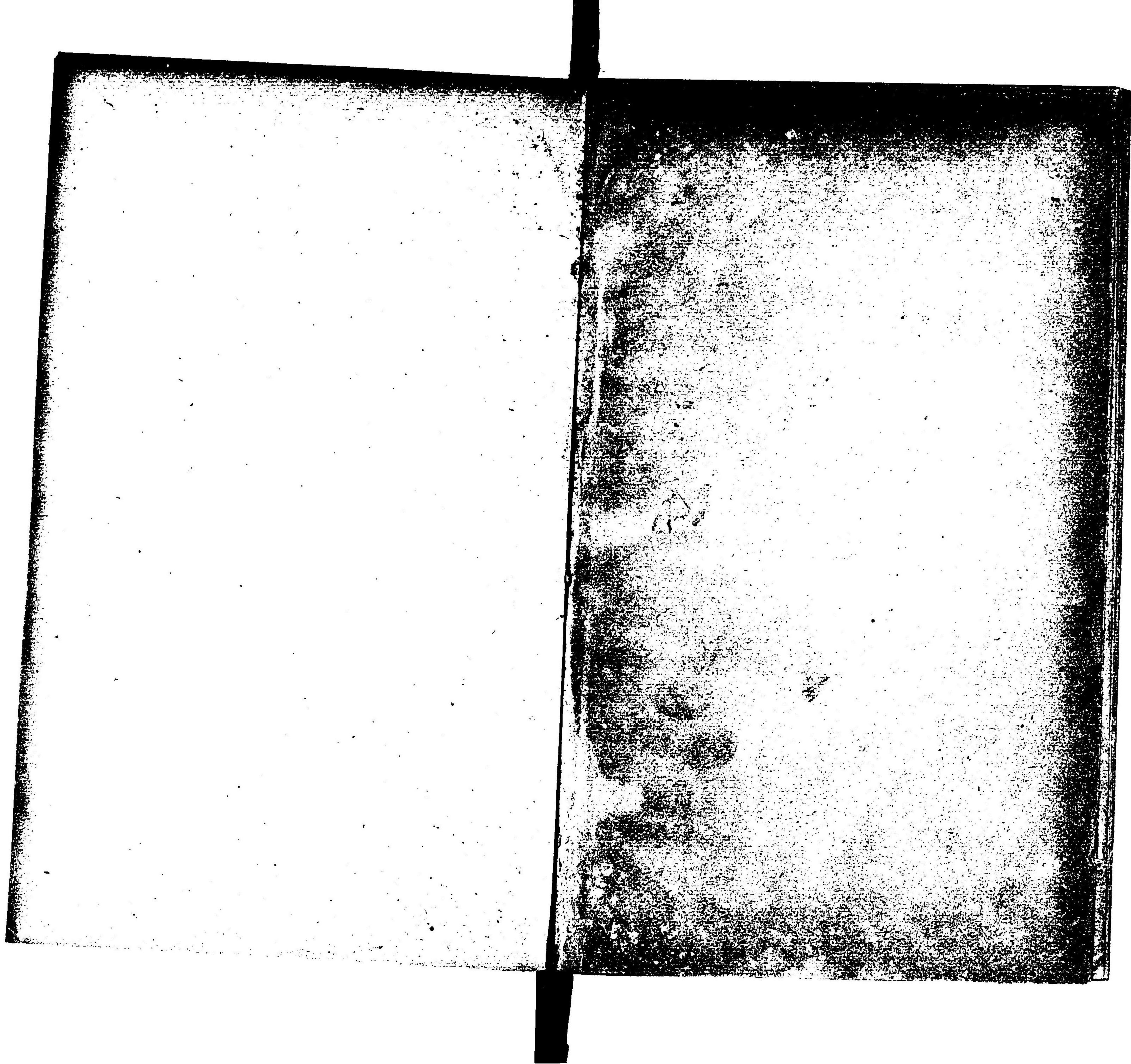
印刷者 中村政雄  
東京市京橋區三十間堀三丁  
日十番地

印刷所 報文社  
東京市京橋區三十間堀三丁  
日十番地

著作權  
及興行  
權所有

發兌元 新橋堂書店  
報知社出版部  
東京市京橋區三十間堀三丁目  
電話新橋二〇三六  
東京市京橋區出雲町新橋際  
電話新橋三六七七

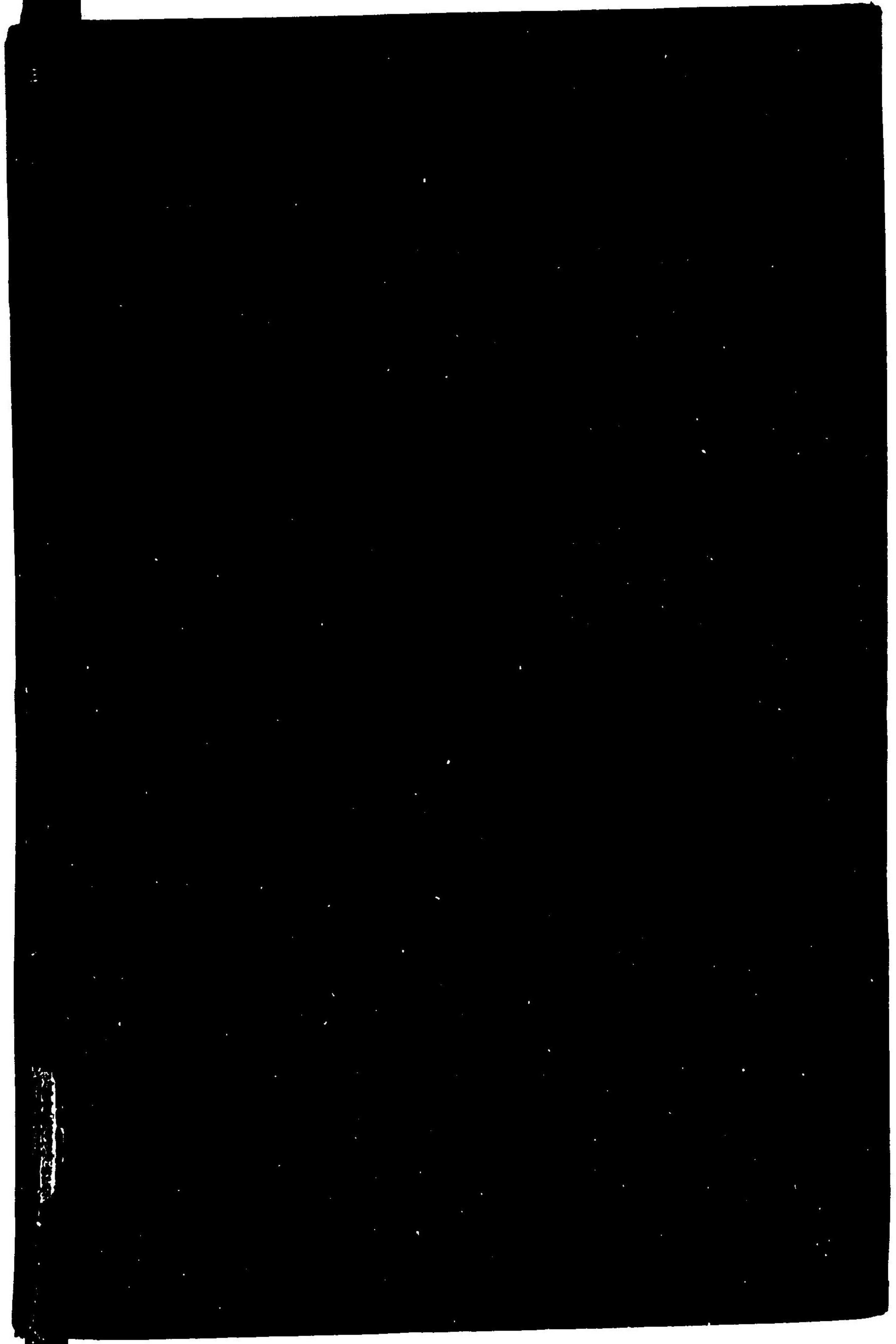






79  
509







088819-000-6

79-507

阿古屋及食道楽

村井 弦斎/著

M38

DBK-0002





